北辰會雜誌

第八號

明治二十九年二月十五日發行

（非賣品）

第四高等學校北辰會

九州大學附屬圖書館

北辰會雜誌第八號目次

論說

僞作文書研究の一例（完結）　浦井鍠一郎
朋友　河原始二
莊子管見（第六號續）　春秋原在文

史傳

成島柳北翁（承前）　金風樓主人
國家復興者としての契沖阿闍梨　埋木乃翁
本論第二歌論

文苑

追悼　安木田頼方
除夜おもひ出の一節を　蓬生庵
半日行　尺骨坊
歌十數首
蟻乃宮　太瑯樓主人
俳句十數句　村上函峯
讀梧陰存稿　蓉湖浦井信
忘年會小引
詩若干首

雜錄

法窓餘錄　乾燥生
十日菊の記
韓錢　嶺村與桂
岩崎法賢先生の柔道に就ての演說　吐虹生
予か冬季休暇に於ける遠足　石伐山房主人
劔術名人法（第三號續）　南山不息生
雜報數件

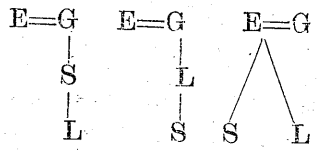
北辰會雜誌第八號

論說

僞作古文書研究の一例（承前）

教授　浦井鍠一郎

此に於て、以上の三假定を考ふるに、第一の假定は勿論無効に屬す、何となれば、レシュア及びソコルニツキの二人が、全く獨立にエオンの文書即ちゲリヤアデイ氏の與へたる全文を拔萃して、殆んど同一の文字を作るは、到底あり得べからざる事なりとす、勿論世には暗合といふ事あれども、かほどの長文を拔萃して、かくも同一の文字を生しては、暗合といひて免ること能はず、此二者の間にある關係あるは明了のことにして、ソコルニツキ氏がレシュア氏を寫せしか、はたレシュア氏がソコルニツキ氏を寫せしか、二者其一を出でず、即ち第二及び第三の場合を考ふるを要す、乃ち第二の場合は如何といふに、波蘭人のソコルニツキ氏が、如何してかレシュアの文書を知り得て、之を寫し取りたる場合なり、然れど此假定も甚だ無理の事とす、何となれば、前にも述たる如く、レシュアの方は之をソコルニツキの文書に比較するに、レシュアの方は遙に流暢にして語格も正しきに、ソコルニツキの方は然らず、さればソコルニツキ氏がレシュアの文書を寫すに當りて、更



に文法を誤り、又流暢の文章を變じて難澁の文となすは、有り得べからざる事なればなり、故に今殘るは第三の場合、即ちレシュァがソコルニッキより寫したりといへる假定にして、是によれば、能く前述の諸困難を說明し得べし、即ち此遺言狀の第一の起りはソコルニッキの文書なりとすれば、同人は波蘭人なるを以て、之を佛蘭語もて認むるに當り、まゝ文法を誤り、且妥當ならざる佛語を用ひたるは、理に於てあり得べきことにて、レシュァ氏が更に之を寫すに當りては、不當の字を改め、語格を正し、且つ流暢なる佛蘭西文に改めたるや明なり、因て今斷じて、此彼得大帝の遺言狀摘要は、ソコルニッキの文書に就きてレシュァ氏が之を寫したる者と認定するものなり、

然り而して爰に一の大なる困難生じ來れり、即ちレシュァ文書の第八章はソコルニッキの文書に見えず、又レシュァ文書の終の第十四章も亦ソコルニッキ文書に見る所なし、然らば此二箇條はソコルニッキを寫したるにあらずして、他の材料より得來りたるや明けし、偖レシュァ氏か何れより是を得來りたるや、勿論此二者は氏が僞作して增加せしものなり、

此第八章及び第十四章は、レシュァ氏の僞作なりといはんには、其理由を述ざるべからず、主觀的には、レシュァ氏が他の場所に於て、ソコルニッキ文書を寫すに當りて、恣に其文意を變換なしことを證明し、客觀的には、第八章及び第十四章を僞作せし所以、言を換へていはゞ、此箇條を挿入して得る利益を述ざるべからず、一千八百十二年即ちレシュァの著出版の年に於ける歐洲の事情は、レシュァ氏をして、特に此兩者を挿入する必要あらしめたるや否を考ふるを要す、

先づ第一の問題即ちレシュァ氏は他の場所に於て、恣にソコルニッキの原文を變し、以て自己の利益を求めたるやといふに、既に第十章に於て著しく改竄の形跡を見るなり、同章に曰く、勉めて澳國との同盟を求め、同國に媚ひて、其最も好む日耳曼統一の策を贊くべし……而して、勉めて歐洲諸國特に日耳曼君侯等を煽動して、同國を敵視せしむる樣に謀るべしと、然るにソコルニッキ文書にては、單に帝國の內部とあるに、レシュァ氏は其にては物足らぬ心地しけむ、歐洲諸國特に日耳曼と改めたるか、是は啻に語調を强めたるのみならず、一千八百九年に魯國は澳太利を挑撥して佛と戰はしめ佛國を敗りし事あり、僅に二三の文字を變換し以て一躍して實際の政治問題に入込み、世人をして、如何にも魯國はさる事をなしきと思はしめむとする、氏の手際亦巧なりといふべし、又ソコルニッキ曰く(附註)此箇條を仕遂るは容易き業なり、何となれば澳太利家は斷えず世界一統(ユニバーサル、モナルキイ)の皇國を建設せむとし、少くも古の神聖羅馬帝國を再興せむと冀望しつゝあればなり而して此目的を達せむには、先づ獨逸國を倒す事必要なればなり云々と、これ一千八百六年ナポレオンに擊破せられしまで澳國は昔の神聖羅馬帝國の正統なりと主張し、實際其時まで神聖羅馬帝國の主權を要求して止まざりしを示す、然るにレシュァ氏は大に改竄を加へて次の如くせり、曰く此高慢なる澳太利家は、既に一度ならず歐洲諸國の上に主權を奮はむと欲して止まず、故に彼が此企を實行せむとせば、我は之を援け、其報酬として匈牙利周圍の地を得べし云々と、蓋しソコルニッキの意にては、澳太利は魯國に煽動されて獨逸を犯さば、匈牙利の地を取るしといふにあり、然るに先是ナポレオンは、澳國を擊破し、一千八百六年には神聖羅馬國皇帝

の名義既に消滅したるを以て、今談神聖羅馬帝國若くは日耳曼帝國に及はゞ、佛國の所業は自然に世人に憶ひ出されて、澳國人の敵慨心を新にし、勢佛蘭西の爲めに不利益となるを以て、之を歐洲人の記臆より取去らむかため、全く日耳曼帝國若くは神聖羅馬帝國なといふ事を止めて、漠然と歐洲諸家の上に主權を奮ふとはいひしなり、同じ理由を以て、先づ日耳曼を倒すこと必要なればの一句を削り去り、其代に匈牙利を略するを明記せり、匈牙利を略せむといふ時は、大に澳國人の恐怖を喚起し魯國を惡ましむるの利益あればなり、要するにソコルニツキとレジユアとは常に殆むと同文章の如くなるにも關らず、間々如此變化あるは、レジユア氏が故意に、自ら爲にする所ありて改竄せしや明なり、是を以てレジユア氏は自己の利益とあらば何時にても恣に原文を改竄して憚らざるを證すべし、

次にソコルニツキに無くして、レジユアにある第八章及び第十四章はレジユア氏に因りて製造さるべき必要あるや如何を研究せざるべからず、レジユア氏か此書を出版したるは、一千八百十二年は抑も如何なる年なりしやを一考すれば充分なり、此年ナポレヲンは澳普兩國と同盟し墺國より三萬普國より二萬の援兵を得て有名なる魯西亞征伐を始めたり、さればレジユア氏が特に第十四章を增加し以て魯國の貪欲の念を公示し、魯國に對して滿天下の惡感情を喚起し、普澳兩國をして樂むて佛國の同盟國たらしめむとはせしなり、又第八章即ち印度の貿易は天下の貿易なり此地を占領する者は優に天下の覇たるべし、故に絶えず波斯を攻擊すべき機會を窺ふべし云々も亦たレジユア氏の僞作なるや明なり、其目的如何といふに、一八〇七年奈翁は有名なるベルリン布告を發し歐洲諸國をして英船を拒絶せしめ以て英國を苦めむとせり、普國和蘭西班牙以太利等は命を奉せしも獨り魯國之を奉せず、黑海裏海を經て印度と通じ盛に印度の商品を持來りて之を英船に附與し、當時にありては印度歐洲の貿易の全權を握りしは魯國なりき、而して魯人が印度と通ずるには必ず波斯國を通過するを要す、さればレジユアの意は波斯人に魯國の秘密を敎へ、太に波斯人を激動せしめ、一方には魯國の貿易に大打擊を加へ、一方には波斯人をして佛國と同盟せしめむことを謀りしなり、猶此章がレジユアの僞作なる證を擧げむに、前にも述たる如く、各章共に不定法を用ひしにもかゝわらず、獨り此章に至りて突然命令法を用ひ、前後の文と大徑庭あること是なり、且又彼得大帝の時代に於ては、黑海及バルチック海に出でむとするに熱心にて到底波斯まで考へ及ぶべきにあらず、さればソコルニツキの文書には全く此等に論及せず、是却て當時の實況を得たる者といふべし、實に彼得時代の魯國は、農業國にして商業國にあらざるなり、以上の理由に因りソコルニツキ文書に見えざる第八章及び第十四章はレジユア氏の僞作なりと斷言することを得べし、

レジユア文書は以上の如し、グリヤアデイ氏は如何、言ふまでもなく、前二者を巧に取捨混合して一大文章となし以て彼得大帝の遺言狀の全文とは詐はれる也、而して一千八百十二年レジユア文書の出版せられたる時は魯國征伐の大騷動の時代にしてあまり世人の注意を喚起する能はざりしが、一八三六年グリヤアデイ氏の其著を公にせし時は天下無時なりしを以て非常の注意を喚起し、グリヤアデイ氏の名聲一時に喧しきに至りたるなり、然らば則ちレジユア氏の不幸はグリヤ

アディ氏の幸となりき、實に世は塞翁馬といふべし、

最後にソコルニツキ文書こそ、僞作の張本人なれ、凡そ史學研究の規則によれば、ある文書を僞作なりと宣言するには、必ず何人か何時に何地に於て如何なる目的を以て僞作をなしゝかを證明するを要し、而して氏の文書は明に此等の問に答ふる事を得るなり、第一此文書の出所甚だ曖昧にして、氏が獄中にありて、同囚者の談話より之を得たりといふが如き、最も不明了の說明にして、十目の視る所、十指の指す所、誰れか氏の說明を以て滿足する者あらむや、況んや、氏が此文書を公にせし目的は主として佛蘭西政府を搖かし、猶出來得べくは他の列國政府をも激動せしめ、以て波蘭の獨立を萬一に僥倖せむとせしこと明なるに於てをや、即ち此文書はソコルニツキ氏に因り一千七百九十五年より同じき九十八年までの間に於て、波蘭若くは澳國に於て僞作せられし者とす、

余輩は先に遺言狀の全文を譯したるに際し三箇の疑團あるを述べたり、而して以上畧述したる點により此疑問は盡く解釋せられたるを信ず、獨り和蘭國の名全缺如したる件に就きては數言を費さゞるべからず、前述の如く彼得帝の時に當りて、諸外國の內最も魯國と親密の關係ありしは和蘭國にして、且つ當時にありては未だ歐洲中の一大勢力たるを失はざりしを以て、彼得帝の時に當り該國を度外視するは甚だ怪むべき至りにて、此遺言狀をして眞に彼得帝の手に成らしめむか必ず和蘭國に就きていふ所あるべき筈なり、然れどもソコルニツキの時代に至りては、和蘭の商權は全く英國に移りて最早第二等國以下の地位なれば、該國に就きて云々するの必要を見ざるなり、されば彼得帝の遺言狀に和蘭の名現れざるは、其彼得帝の時代に成らざりしを證明するものなりとす、他の二の疑問即ち魯文を用ひざりしは其目的佛蘭西人に讀ましむる爲めなりしを以て、語調の前後不揃なるは所々に改竄を加へしがためなり、

以上論じ來りたれば、最早彼得帝遺言狀の僞作に出でたることは明了にして多辯を要せざるべし、即ち波蘭人のソコルニツキ氏は此文書を僞作したる發動人にして、佛蘭西のレッエァ氏は之を利用して政治上の目的を達せむとしたる第二の僞作者なり、同じく佛蘭西のゲリヤアディ氏は前二者を綜合して彼得帝の遺言狀全文と唱へ、ナイト、ヲフ、エオン氏が魯國より持歸りたる秘書など勝手なる虛言を吐きて己の著書の發賣高を多からしめむと謀りし第三の僞作者なり、世には僞作の文書少きにあらねども、此僞作文書ほど人心を激動したるはなく、此文書ほど巧妙を極めて深く世人を欺きし如きは殆むど稀にして、現に我邦人も談魯國に及ぶ時は往々彼得大帝の遺言狀を稱すを常とす、されども彼得帝遺言狀といへる者は全く僞作なるは以上述たる如し、獨り此僞作文書のために一般世人の攻擊を受たる魯國政府こそ迷惑の至なりしならむ（結了）

朋友

河原始二

釋迦牟尼に弟あり難陀と云ふ、嘗て相携て魚肆に至り小籍の魚草を取りて少らく之を握り依て其手を嗅かしめ之を問ふ、難陀曰く唯腥臭の氣ありと又香店に至り香を裹む紙を取り少らく掬して之を棄てしめ復問ふ、難陀答ふ唯氣香を聞くと釋迦難陀に語て曰く善友惡友相染習すること亦是

の如し、若し善友と親まは必ず當さに廣大の名聞を得べしと。楊子が岐路に臨むで哭し墨子が練糸を見て泣きしもの固より偶然にあらず、蓋し天下の事一として我力量才德に依らざるものなし然れども之を輔佐し慰撫する者あるにあらずむば難艱に於て蹉跎に於て寧んぞ能く其目的を達し人生の義務を盡すを得べき。其是れある者實に生涯の同伴侶其人あればなり、其人之を朋友と云ふ。希臘の先哲「アリストートル」二千年の古にありて朋友の交誼を三別して曰く利益の爲めに交はる者之を營利的交誼と云ふ、快樂の爲めに交はる者之を主樂的交誼と云ふ、德義の爲めに交はる者之を道義的交誼と云ふと。近世勢威に阿りお髯の塵を拂ふ者少なからねば今假りに之を名つけて阿勢的交誼となし四種類ありとなさむ、而して此四者を考察するに勢威の爲めに交はる者は勢威傾けば則ち交誼絶ゆ、其人に交はるにあらずして其勢威に交はればなり、快樂の爲めに交はる者は快樂盡くれば則ち交誼解く、其人に交はるにあらずして其快樂に交はればなり、利益の爲めに交はる者は利益窮まれば則ち交誼散ず、其人に交はるにあらずして其利益に交はればなり。利益、快樂、勢威此の三の者は謂ふ所の我に於て浮雲の如きもの、今日我身を霑すと雖ども明日何の風あつて之を吹き飛ばすや計る可からず。德義の爲めに交はる者に至つては身死するにあらざれば交誼斷つべからず、否な醜骸朽て土となるも猶能く其餘澤を垂るゝに足らむ、德義なる者は千萬世國家の柱石となりて子々孫々に高尚なる觀念を傳ふるものなればなり。「シセロ」が朋友は眼前にあらざるも猶存在す、貧きも猶富む、弱きも猶健全なり、而して死せりと雖ども猶生く、余に向つては「シピオ」猶生くるが如く而して彼は常に生くるなりと云へるもの實に此れが爲めなり。然らば吾人が求むべきもの獨り道義的交誼にして他の三者は成るべく之を避けざるべからず、之を爲す如何すべき、橋本景岳既に說けり

總て友に交るには飲食歡娛の上にて附合遊山釣魚にて狎合候は不宜、學問の講究、武事の練習、士たる志の研究、心合の吟味より交を納れ可申事に候、飲食遊山にて狎合候朋友は其平生は腕を振り肩を拍ち互に知己〳〵と稱し居候へ共無事の時吾德を補ふに足らず、有事の時吾危難を救ひくれ候にてはなし、これは成り丈屢出會不致吾身を嚴重に致し附合候て必狎昵致し吾道を褻さぬ樣にして何とか工夫を凝して其者を正道に導き武道學問の筋に勸め込候事友道なり、

損友は佞柔、善媚、阿諛、逢迎を旨として浮躁、辨慧、輕忽、粗慢の性質ある者なり、此は何れも心安く成り易き人にて世間の女子小人とも其才智や人品を譽居候者なれども聖賢豪傑たらむと思ふ者は其所擇自ら在る所あるべし、

吾人又何をか加えむ我眼を以て佞柔者、浮躁者を識別し自重心と克己心とを以て吾身を守り己むを得ずして交際するにせよ必ず狎昵して吾道を褻さゝらむこと勿論なり。狎昵、狎昵の二字吾人實に甚だ之を嫌惡す、毛物偏の附きたるより見るも猫猿の如き道義的觀念なき獸類に用ゆべきものならむ、而して堂々たる人面者流の交誼或は多く此二字に歸せむこと嗚呼豈に亦悲歎の至りならずや。何とか工夫を凝して其者を正道に導き人間らしき人間となさゝれば古來正義を以て天下に峙立し君子國を以て四海に自任する我大日本帝國、現に國威を六合に伸揚し國權を八紘に擴張

するに對しても誠に面目なき次第なり。起てよ大男兒、起て汝が道義の鋒を揮ひ汝が友情の涙を濺ぎ我に對しては損友たる彼等に彼等に對しては益友たる實を得せしめよ、彼等も一度は吾人と同じく慈母の乳房に安眠せるもの、よも道心なきことはあらじ踏み迷へばこそ斯くもあれ、憐むべきかな。孔子曰く無友不如己者と宋の范祖禹恰も此理を說明して曰ふ與賢於己者處、則自以爲不足、與不如己者處、則自以爲有餘、自以爲不足、則日益、自以爲有餘、則日損、と景岳の益友に就て曰ふ所又頗る益あり

益友と申すは兎角氣遣な物にて折々不面白事有之候を篤と了簡致すべし、益友の吾身に補ひあるは全く其氣遣ひなる所にて候、士有爭友雖無道不失令名と申す事經に有之候、爭友とは即益友なり、吾過を告知らせ我を規彈致しくれ候てこそ吾氣の附ぬ處の落も補ひたし候事相叶ひ候なり

益友の見立方は其人剛正毅直なるか、温良篤實なるか、豪壯英果なるか、俊邁明亮なるか、濶達大度なるかの五つに出でず、此等は何れも氣遣多き人にて世間の俗人ともは甚だしく釁棄致居候者なり

氣遣な物の四字評し得て神を穿てり、吾人亦之を評すべき言辭を知らず、益友を說明せむに幾萬言を以てするものあらむも恐らく此四字の妙趣津々たるに及ぶ可からざらむ。益友にして氣遣な物ならざる時は是れ既に益友ならざるなり、不如己者にあらずむば必らずや狎昵せる者乎。孟子曰く責善朋友之道、と善を責められて折々面白からぬ事あるは人情の免かれざる所、而かも王陽明曰へるあり、大凡朋友須箴規指摘處少、誘掖奬勸意多、と又云ふ與朋友論學須委曲謙下寛以居之と此心あり此行ありて而して後始めて善責むべし、此心と此行とあらずして責善、唯是責善を意となさば疎せられずむば幸或は激して絶交の狂態をなすに至らむ。世人若し先きの損友に對する者と此益友に對する者とを照比して我朋友如何と顧みなば或以て思半に過ぐるものあらむ。周子居曰く吾れ時月も黃叔度を見ざれば鄙吝の心已に復生しぬと、益友の我身を感化する實に至大なるものあり、古の師は弟子を敎ゆるに身自ら摸範となつて嚮導誘掖是れ務めぬ、弟子は各其力に應じて師の一言一行を見聞し感心銘骨之を學むで唯其及ばざらむことを恐れき。今や然らず秩序的の敎育は全校學生を鑄て同一摸型に製出せむとし師弟の關係又昔日の如くなる能はざるを以て益々益友の薰陶漸染欠く可からざるを見るなり。書を讀み字を覺ゆるは一藝のみ、化學を知り物理を悟る又一藝のみ、歷史を暗むじ語學を善くする又々一藝のみ、未だ以て吾人が學問の本旨を得たりとなすべからざるなり。學東西に達し識古今に通ずる其人なきにあらず、然れども吾人が心を傾けて推服する能はざる所以のもの何ぞ、德を修めず道を得ざるが爲めにあらずや。人物の高下は修德得道の多少に關す、而かも德と道との修得し難きこと語歷理化等の學び易きが如くならず、此に於てか其之を修得するの法益友の薰陶感化に待つ所以なり。孟子曰く一鄕之善士、斯友一鄕之善士、一國之善士、斯友一國之善士、天下之善士、斯友天下之善士、以友天下之善士、爲未足、又尙論古之人、頌其詩、誦其書、不知其人可乎。と一鄕之善士、一鄕之善士と友たることと容易ならず、況んや天下之善士、天下之善士と友たることをや、唯古之人に至りては膝を容る

丶の茅廬猶招して共に談るべし。益友の及ばざる所即ち古之人在るあり、吾人固より德と道との師に乏しからず、況んや益友と幷び其師を師とするに於てをや、休道他鄕多苦辛、同胞有朋自相親、紫扉曉起霜如雪、君は泉流を汲み我は薪を拾ふ的生活吾人未だ之を經驗せずと雖ども他鄕苦辛多き中に處して日に怡々然たるもの實に益友の存するあればなり。請ふ進で朋友を得るの機會を尋ねむ。生れて鄕曲を同うし幼時は嬉戲を與にし長ずるに從ひ小學中學に袂を連ねたる者、此種の朋友は情誼を交ゆると最も長く苦樂を與にせるとも最も多きを以て朋友中特に懷かしき感情を有する者なり。隨て災厄不幸に際し救助是れ力むること兄弟と雖ども及はざるものあり、然れども朋友中にて最も價値なき者を求むれば亦此種に屬せむ。何となれば未だ賢愚を辨別するの明なき時に於て往來せる者なれば其關係比較的兄弟に近きものあり、長じて學德なく膽識なきを悟るとも從來の行掛り上其交際を止む可からざればなり。試驗を受けて或は他校より轉じて一校に入學したる場合には同境遇なる新入生と最も早く緝睦するものなれども同窓中特に我朋友として交を英俊に結ばむと冀ふべし、語らむと欲して親しき者なく遊ばむと欲して知る人なき間は只管衆生の言動擧作に注目して其爲人の觀察に餘念なからむ。斯く愛憎偏頗なき心を以て觀察する時は我見識相應正當に其性情學德の如何を知り得るものなり、斷金の眞友たらむ者此の如くして衆才中より選擇し得べきも然れども兎角人間に一種の自尊心ありて此方より殊更らに交際を求むるを以て恥辱となすにはあらねど稍嫌ふの情あり、既に其人物の高尙有爲なるを愛すと雖ども或機會に相遇するにあらざれば容易に胸襟を吐露するに至らず、甚だしきは言語をも交えず過すことあり。是れ其人に對して未だ至誠の心なきに依るべきも一見舊知の如き者あるに比して不可思儀と云はざる可からず、而かも容易に友人とならざる者は一旦友人たるに及んで又容易に其交情を疎にする者にあらず。若し夫れ然らずして忽ち親睦懇和せむ者其友情や恐らく繼續すまじ、早く熱する者は冷ゆることも亦速かなればなり。幼少よりの同伴者と中途よりの同行者に於て後者に於て又尋常ならざる者あり、强者を挫き弱者を扶くるは人間の至情、衆生に苦めらるゝ者の味方をなし、保護奬勵の結果殊の外親密となることあり、不羈狂狷にして俗輩に容られざる者に同情を表し一見性情の全然相反せる間にありて意氣投合することあり、又烈しき爭論或は喧嘩の後飜て刎頸の交を結ぶ者あり。藺相如の廉頗に於けるも此例なれども猶適切なる者を華盛頓に見るなり、華盛頓少き時一營兵に將として歷山太亞に次す。偶「ペーヂ」と事を論じて合はず、語之を犯す、「ペーヂ」怒りて杖を以て華盛頓を地に擊倒す。營兵之を聞き報讎を圖らむと欲す、華盛頓切に請ふて軍衆の怒を息め、以爲らく曲我に在り謝せざる可からずと、次日人を遣して「ペーヂ」に酒舍に相見むことを傳へしむ。「ペーヂ」意へらく是れ必ず我を要して鬪を挑む者ならむと、至れば則ち案上酒肉を陳べて兵器を見ず。華盛頓坐を起ち從容として曰く人孰か過なからむ、能く之を改むるを貴しとなす、僕昨日罪を足下に得たるも足下亦已に我に報ぜり。足下若し既に報ぜる者を以て足れりとなさば則ち僕が手此に在り、願くは握手朋友を復せむと、「ペーヂ」感激して遂に眞友となりしとぞ。然れども此の如き場合にありては一方の者藺相如若しくは華盛頓の如き大度雅量の君子ならざるべからず。之れに反して廉頗或は「ペーヂ」の如き者のみならば兩虎辛

にして死せざることあらむも其交情は永久温むべからざるべし。世喧嘩爭論するもの多きも飜て朋友たること能はざる所以は其曲なる者も謝するを憚ると共に兩者の人物敢て逕庭なければならむ、鑑みざるべけむや。

吾人屢之を軍歌に聞て常に一種の感情に打たるものあり。曰く「シーザル」はその眞友の手にかかり議院の中に殺されぬ、其眞友の云ふことに民を奴隷となさむより寧ろ「シーザル」を殺さばや、我羅馬を愛するは眞友よりも甚だしと羅馬を愛するが爲めには一言之を諫止するとなくして眞友を殺すを敢てすべきか、民を奴隷となさゞらむか爲めには猥りに之を欺て眞友を殺すを憚らざるべきか。之を誦する兒童は如何なる心を以て之を口にするか、此を聽く父兄は如何なる心を以て之を耳にするか。史籍を繙て英邁なる「シーザル」が咄「ブルータス」汝も亦かと一喝し自ら其面を掩ひ復た抗せず、敵將「ポンペー」の塑像の下に斃れたるを知らむ者誰か此英雄の末路を憐むと共に所謂眞友なる者は斯くも頼み甲斐なき者なるかの疑團を生ぜずむはあらざるべし。然り眞友とは決して此の如く頼み甲斐なきものにあらず、「ブルータス」は小人のみ、「シーザル」の嬖人のみ、他の威權赫灼たるを嫉妬して之を斃せるなり、「シーザル」は眞友の爲めに殺されたりと云ふは豈に眞友の二字を濫用せるものにあらずや。慶長四年石田三成兵を起して德川家康に抗せむとするや、大谷吉隆を佐和山に招き其謀を告ぐ、吉隆之を諫むること甚だ切なり、三成聽かず、吉隆曰く子が志奪ふ可からず且つ子謀を我に告ぐ、事成らざるを知ると雖ども寧ろ相反きて不義の友たるに忍びむやと。後關ヶ原の役西軍にあり最も奮戰し大敗自刎して死す。嗚呼關ヶ原の役や、實に天下分ヶ目の大戰爭なり、日本を兩分して東西兵を算すること各七萬、當時の驍將勇士皆會戰せり、而して一人稜々たる俠骨百世の下に香はしく以て儒夫を起たしむる者吾人之を吉隆に見る。孔子曰忠告善導之不可則止無自辱焉、と吉隆は然らず不可なりと雖ども猶義を執りて動かず友事に死して恨むなし、友たらは須らく此の如くなるべし。彼の管夷吾や鮑叔牙を稱して曰く我を生む者は父母、我を知る者は鮑子と、眞友たらむ者は我を知らると共に我亦彼を知るを要す。よしや一石の鹽を會食するにあらずむば能く互に其人と爲りを窺ふとなしと云ふ古語あるにせよ、彼が長所と短所と我に優る所と劣る所と性情癖習悉く之を知るにあらずむは未だ以て眞友と稱すべからざるなり、殊更らに之を探知せむと欲して然るにあらず、朝夕講習工夫の際、不識不知に知り得又知られ得之を貫くに信義の德を以てし而して後眞友の結緣堅し、年月も之を疎する能はず、山海も之を隔つ能はず、鼎鑊亦之れを渝ゆ可からざるなり。聞く後漢の范式字は巨卿、山陽金鄉の人、少うして大學に遊び汝南の張劭と友とし善し。劭字は元伯、並に鄉里に歸省す、式元伯に謂て曰く二年の後當さに還り過て尊親を拜し孺子を見むと、乃ち共に日を剋して分る。後期日方さに至らむとす、元伯且さに母に告げ饌を設て之を待たむと請ふ、母曰く二年の離別、千里の結言、汝何ぞ相信ずることの審かなる、對て曰く巨卿は信士なり必ず乖違せず、母曰く若し然らば當さに汝が爲めに酒を醞さむと。其日に至り巨卿果して到り堂に升り拜飲し歡を盡して別ると、友たらは又將さに此の如くなるべし。嗚呼信や義や德の大なるもの、眞友の素實に此に在りて存す、然るに世信なく義なき人妄りに稱して某は我眞友なりと云ふ、其言未た終らず其

長所を傷け其短所を罵て假す所なし。吾人之を聞く毎に其人の眞友とは果して何を意味するやを訝り眉宇の皺むを覺えざるなり。親しき間にも禮義あれよとは俗間傳ふる所、禮義は敬意に生ず、敬意なくして親しき是れ即ち狎昵せる者、狎昵せるは眞友の眞價を知らずして其神聖を瀆せる者なり、眞友の眞價を知らずして其神聖を瀆し自ら稱して眞友なりとす。世謂ふ所の眞友多くして而して眞の眞友なる者少なき亦宜ならずや。吾人は斷言す。慢心ある者、敬意なき者、約して踐まさる者、語つて實なき者。此等諸ろ一言以て之を蔽へば信なき者は眞友の情趣を知らず又眞友を有せざる者なりと、而して眞友の益友に一歩を進むる所以は益友は氣遣なる物なる束縛を脱して二躰同心無我無彼光風霽月洒然として藹然たるに在り、對坐無言なるも樂其内にあり、相去る千里、相見ざる十年樂亦其内に在り、謂ふ可し人生須可有知己、世上悠々何足論

莊子管見（承前）

春秋原在文

夫れ大塊の我に形を予ふや亦賦するに眞宰を以てし、之をして身を率ゐて道と體たらしむ、故に人其の生の自然に逆ふて之を害するなくんば、德天に合し行神に通ずるを得べきなり、然るに世人多くは形の役する所となりて而も免るゝ所以を知らず、大に憐むべきなり、嗚呼之れ何に由て夫れ然るか、他なし天地同體の身中に强て我なる小肉團を限り、之に執し之に着し一偏見を此の間に立つるを以てなり、故に紛々たる世俗の累を免れんと欲せば、先づ之の我見偏執を脱却して是非の紛爭を絶つべきなり、滔々たる天下多くは之れ區々五尺の臭骸を將ゐて直に以て人となし亦靈の神に通ずるあるを知らざるの徒なり、故に六識の一度其の美とする所に遭遇するや、常に戀々として之を私せんとし、色に聲に香に味に觸に法に心之が奴となりて無限の苦惱を受け其の寐るや魂交り其の覺るや形開き、胸中嘗て須臾も吉凶利害の念を離るゝ能はざるなり、莊子爲に嘆して曰く

與物相刃相靡其行盡如馳而莫之能止不亦悲乎終身役々而不見其成切薾然疲役而不知其所歸可不哀邪人謂之不死奚益其形化其心與之然可不謂大哀乎人之生也固若是芒乎其我獨芒人亦有不芒者乎

嗚呼人の生にして斯の如く芒なるに止まらしめば、焉ぞ夫れ禽獸に異なりと云はんや。然れども其の斯の如く芒なるものは、是れ一に私欲を以て自ら昏すの弊のみ、道を知るの人豈に夫れ斯の如く芒昧ならんや、而して道とは眞實無妄にして至らざるなく、天地を經緯するの大則にして、夫婦の愚も尙與り聞く事を得べきものなり、噫此の道にして衆人の知る所とならず、芒昧を以て一生を終らしむるもの、夫れ亦因なくして可ならんや、道固六合に彌漫すと雖へども而も小成に隱る、彼の滔々として我なる偏見に執着し、道に從て化する所以を知らず、孜々屹々として常に私欲の驅役する所となり、以て自ら得たりとなす輩、焉んぞ能く道の何たるを知らんや、夫れ五蘊は皆空にして一切は道に依て化せらるゝの幻形のみ、既に幻形なり故に道を離れて別に主とする所なし、亦何に執し何に着して彼我を分つ事をなさん、苟も道の何たるに通せば、我は即ち天地にして天地は即ち我なり、爭ふべき物もなければ役せらるゝの形もなし、唯化に乘して推移す

るあるのみ、莊子世人の未だ道に達せず、空しく彼我を稱して一生を芒昧に終るを哀しみ、天地萬物の大本を擧げ論して曰く

以指喩指之非指不若以非指喩指之非指也以馬喩馬之非馬不若以非馬喩馬之非馬也天地一指也萬物一馬也

嗚呼よく此の間の消息を解するを得ば、天地我と並び生じ萬物我と一なり、是非心に應して私の攪す所とならず、事を見る明にして理を察するに詳に、機に臨み變に應じて胸中に罣礙なからん唯夫れ胸中に罣礙なし故に虛無寂漠にして通せざるの所なし、虛無寂漠にして通せざるの所なし故に其の得たる所を忘れ自然にして行ふ、其の得たる所を忘れ自然にして行ふ故に其の道なると否とを忘れて是非の紛爭なし、是を以て聖人は和光同塵にして能く天鈞に休し、一私存せずして萬善咸く備はれり、故に偏見を執らずして圓轉混融に、分辨を好まずして愚昧なるが如く、而も其の中至精至明にして毫も蔽ふ所なし、天下の是非皆此に於て決し天下の至是即此に於て出つ、大なる哉道の用斯の如くにして能く天地六合を包ぬ、噫稱して萬物の靈と云ひ、而も芒昧にして朽腐を蜂蝶と同じくする、是れ豈に丈夫の得て忍ぶべき所ならんや、何すれぞ速に五尺の臭骸を脫却して位を天地と伍せしめざる、然るに世人多くは道の何たるに通せず、常に私欲の昏す所となりて五里霧中に彷徨し、其の己を利するを是とし其の己を利せざるを非とし、紛々以て爭ふ事をなせり、大に哀しまざるべけんや、嗚呼彼等未だ心に成るなし、焉ぞ是の非にあらざるを知らんや、亦非の是にあらざるを知らんや、若し心に成るなくして是非ありと云はゞ、是れ所謂今日適越而昔至なり、天下焉ぞ斯の如き怪理あらんや、彼等が是非する所の妄なる知るべきのみ

莊子即ち曰く

勞神明爲壹而不知其同也謂之朝三何謂朝三曰狙公賦茅曰朝三而暮四衆狙皆怒曰然則朝四而暮三衆狙皆悅名實未虧而喜怒爲用亦因是也

噫名實未だ虧けずして喜怒之に隨ふ、豈に是れ衆人の常態にあらずや、誰か獨り衆狙をのみ是れ愚と云ふ、天下衆狙と共に愚なり、彼等幻形を逐ふて實在なりとし空しく此に悲喜す、何ぞ一に衆狙が朝三暮四を嫌ふて、朝四暮三を喜ぶの愚に似たるの甚だしき、罔兩景に問ふて曰く、曩に子行き今子止まる、曩に子坐し今子起つ、何ぞ其特操無きと、景の曰く、吾は待つ事あつて然る者なり、吾が待つ所又待つ事あつて然る者なり、吾が待つは蛇蚹蜩翼なり、惡ぞ然る所以を識らんや、惡ぞ然らざる所以を識らんやと、夫れ天地萬物は皆待つ事ありて然るなり、吾が然る所以を知らずして然る者は命なり、故に道を爲る者は亦其の然る所以を知らずして其の自然に任ず、是を以て聖人心を無物の初に遊ばしめ能く天鈞に休す、故に胸中嘗て是非の見なし、是非の見なければ其の知知らざる所に止る、其の知知らざる所に止まれば天下の眞全し、亦何を怒り何を喜びてか自然に逆はんや、人皆知るを以て知と爲して、其の知らざる所に止まるを知らず、夫れ不知の知は理の名なくして理具はらざる事なく、事の迹なくして事應ぜざる事なし、所謂天下の大本にして千條萬緒截然として紊れず、四達五會渾然として露はれざるものなり、莊子即ち不知の知の至り盡して加ふべきなきを論じて曰く

夫大道不稱大辯不言大仁不仁大廉不嗛大勇不忮道昭而不道言辯而不及仁常而不成廉清而不信勇忮而不成五者園而幾向方矣故知止其所不知至矣孰知不言之辯不道之道若有能知此之謂天府注焉而不滿酌焉而不竭而不知其所由來此之謂葆光

天鈞に住し滑疑の耀を保つもの其の德何ぞ至れるの大なる、莊子尙齧缺王倪の問答を擧げて其の意を明にして曰く

齧缺問乎王倪曰子知物之所同是乎曰吾惡乎知之子知子之所不知邪曰吾惡乎知之然則物無知邪曰吾惡乎知之雖然嘗試言之庸詎知吾所謂知之非不知邪庸詎知吾所謂不知之非知邪且吾嘗試問乎汝民溼寢則腰疾偏死鰌然乎哉木處則惴慄恂懼猨猴然乎哉三者孰知正處民食芻豢麋鹿食薦蝍蛆甘帶鴟鴉嗜鼠四者孰知正味猨猵狙以爲雌麋與鹿交鰌與魚遊毛嬙麗姬人之所美也魚見之深入鳥見之高飛麋鹿見之決驟四者孰知天下之正色哉自我觀之仁義之端是非之塗樊然殽亂吾惡能知其辯齧缺曰子不知利害則至人固不知利害乎王倪曰至人神矣大澤焚而不能熱江漢沍而不能寒疾雷破山風振海而不能驚若然者乘雲氣騎日月而遊乎四海之外死生無變於己而況利害之端乎

然り而して至人は啻に利害を之れ知らざるのみならず、亦實に生死を運ねて之を知らざるなり、夫れ卵を見ては時夜を求め、彈を見ては鴞炙を求め、隷を以て相尊びて役々たるは衆人に非ずや、思なく慮なく沌然として愚なるが如く、萬歲の久しきに通じて始終なきものは聖人にあらずや、隷を以て相尊ふ故に生に着して死を惡むの念强く、沌然として始終なし故に一切を放下して憂ふるなし、噫嗟假令生を說ひ死を惡むの念頗る强しと雖へども、其の數に於て補ふ所何處にかある夢に酒を飲む者は旦にして哭泣し、夢に哭泣する者は旦にして田獵す、其の夢に方てや其の夢なるを知らず、夢の中又其の夢なるやを占ふ、覺て後其の夢なりしを知る、噫焉んぞ大覺あつて、生の此れ大夢なりしを知らざるあらんや、而るを愚者自ら以て覺めたりとなし、竊々然として之を知るとす、君と云ひ牧と云ふ何ぞ一に固なる、物皆予と夢なり物皆予と夢なり、昔麗姬の晉人に獲らるゝや、涕泣して淚襟を沾せり、而して其の王所に至り王と筐牀を同ふして芻豢を食ふに及び、大に其の泣しを悔ひたり、夫の死者亦焉んぞ其の始に生を蘄めしを悔ひるなからんや、即ち知る生を說ふの惑にして、死を惡むに同しく愚なりし事を、唯年を忘れ義を忘れて無竟に振ひ諸を無竟に寓すべきなり、莊子生死の二なきを明にして曰く

昔者莊周夢爲蝴蝶栩栩然蝴蝶也自喩適志與不知周也俄然覺則蘧蘧然周也不知周之夢爲蝴蝶與蝴蝶之夢爲周與蝴蝶則必有分矣此之謂物化

唯之れ物化なり故に蝶の夢たるのみならず周も亦夢なり、蝴の妄なるのみならず周も亦妄なり、然るに世人之に通せず是非の論紛然として止まる所を知らず悲い哉　（未完）

史傳

成島柳北翁（承前）

金風樓人

是より先き竹川町に。公文通誌なる者を發行す。社運微々として奮はず。此に至りて翁を引て社

長となす。翁欣然として聘に應し。謂て曰。以て吾熱腸を吐くべしと。便ち題號を改めて朝野新聞となし。紙面を更正し記事の精確を主とし。筆を奮ふて當世を談ず。翁もと才華雄俊にして思想富瞻。筆を下せば千言立ろに成る。揭ぐる所の雜錄每紙數千言。神出鬼沒奇思人の頤を解き。規世諷俗未だ嘗てその中に在らずんはあらざりき。嗚呼半生の歷史はわれ已にこれを說きぬ。儒を以て幕府に仕ふるもの六凡十年。固より口に堯舜を喋々し。心に禹湯文武周公孔子を崇拜するを以て能事となすの腐儒に非ずと雖も。亦夙に洛閩の間に敎化感染せられしもの。進んでは君を諫め退いては親に孝に(後に詳し)。造次顚沛も諧謔を口にするの隙あらざるなり。況んや國家多事に際會するに於てをや。或は進んで騎兵頭となり。或は退いて英學を講じ。再び擢てられて財政整理の激務にあたる。此間未だ嘗て冗談の以て人をして破顏洪笑せしめしものあるを聞かず。宛然たる堂奧の一君子なりしなり。而して今や一旦管城子と相提携して時事を論ずるや。洒々落々文字によりて文字を作らす。天眞爛漫愈出でゝ愈妙。政府を攻擊し世人を嘲弄するもの具さに務む。轉鎗刀の霞を劈き劒戟空を凌き。兵は流水の如く馬は疾風の如きの慨あり。世人呆然として意表に驚き。都鄙交翁の名を知るに至る。是豈に人生の大々的變化に非ずや。當時翁の知友と雖も尙ほその豹變に驚きしと言ふ。況んやその未だ翁を知らざるものに於てをや。古し老泉少にして學を喜ばず。年已に壯なるに及んで猶書を知らず。世人その愚を笑ふ。然るに一旦忽然として悟るところあるや。即ち其素より往來する所の少年を謝し。戶を閉さして書を講し文詞を爲るもの歲餘。進士に擧げられんとして再び中らず。退て歎して曰。此れ吾學となすに足らざる也と。

悉く作るところの文數百篇を取りて之を焚き。益戶を閉して書を讀み。事を絕して文辭を作らざるもの五六年。涵蓄充溢壓へて發せず。久之慨然として曰。可ならんと。是によりて筆を下す頃刻にして數千言。其縱橫上下出入馳驟するや必らず深微に造て而して後止む。時人舌を卷て驚き。鼻液をたらして呆然たりしと。此れ亦人生の大々的豹變に非ずや。同じくこれ大々的豹變也。然かもその因て來るや自ら別也。彼れや涵蓄するところの深きにより。之を發するや遲しと雖も。一旦俄然として其豪口を發くに及んでや。赤龍雲を呼んで東西宇宙に飛揚するに似たり。而して翁に至りては則ち然らず。實に時勢の激變は亦翁をして激變せしめしなり。蘊蓄の如何西航と否とは關するところにあらざる也。青山白浪起、井底紅塵飈。世事由來顚倒するもの多々。英雄却て濁世に長し。正義の士却て亂離の間に生る。般の末葉にあたりて二子西山の坡に飢ゆるものは是れか。荊楚の晩年屈平石を抱いて汨羅に投ずるものはこれか。紛々幕末擾亂の間松陰象山憂國の涙に咽むで斃れ。昭代の隆〇〇却て私を營んで愛妓に溺る。燈籠飛入露柱、佛殿走出山門。亦必らずしも怪しむに足らずとせば。當時事々日に新に泰西崇拜の風は勃然として起り。貴紳徒らに美髯を貯へ權妻を圍ゐ。舞踏に耽りて佳人を挑むの時に當りて。翁か反對の側に向つて性行を一變し。筆端泡を飛ばして大々的氣燄を吐きし者。亦怪むに足らざる也。

是に至りて社運頓に昂り聲價江湖に囂し。是より先き新聞紙なるもの僅かに初步にして。未だ社會の耳目となるものあらず。從つて亦政府の耳目をひくものあらざりき。然るに年所を經ると良久しく。茲に翁か朝野新聞に入るに及んでや。所在新聞、新誌なるもの起り。盛に民權を稱へて

政府を攻擊するものあるに至る。是に於て政府は遂に明治八年乙亥六月を以て新聞條例を出し。大に言論の自由を妨げぬ。翁是に至りて憤然。滿腔の熱血は迸りて擬蘭亭記、辟易賦（憚かるところあれば揭げず）となり。徹頭徹尾不平をならし。「壓制を好むは古風也。言路を塞くは舊習たり」と絶叫す。辭皆簡にして意を得。蓋し見時新聞的文章の濫觴なるか。此年鐵腸末廣重恭曙新聞を去りて來るあり。專編輯に從事し議論諤々少しも憚らず。相率ゐて聲價大に振ふ。翁是より專ら雜報に從事し別に詩欄を擔當す。（新紙詩欄を設くる實に翁に始まると云）。その阿呆山賊の如き暴風記の如き。句々皆時事に的中す。諧謔嘲辭に巧なる。讀者をして覺えず抱腹絶倒せしむ」。此時に當りて洛陽新聞記者の主なるものを擧ぐれば。沼間弄花の嚶鳴にあるあり。福地櫻痴、篠野採菊、岸田吟香の日報にあるあり。加藤九郎、矢野駿男、杉田定一の采風にあるあり。小松原英太郎の評論にあるあり。箕浦勝人、植木枝盛の報知にあるあり。皆錚々民間の俊英とす。而して此鏘々たる諸英の間に立ちて。朝野新聞の位置たる果して如何。乞ふ去りて翁が改稱節賀宴記に誌るすところを見よ。

爾來日に月に我々の同主義なる新聞記者に於ては。公然多少の痛苦を感ずるもの。或は冥々の中に意外の困難を與ふるものを社會に發生するに至れり。加之客年以來全國商業の振はざる。農家の窮する甚しきなり。新聞各社又幾分か其影響を被ふるに至れり。諸君（來賓記者）皆言ふ。朝野新聞の如きは社運頗る盛昌なれば。今日未だ苦情を訴ふるの秋に非る也と。然りと雖も履下の新霜既に我足を寒からしむ。焉ぞ堅氷の我體を鎖すの時なしと謂て偷安するを得や。亦痛心焦慮して將來の幸福を保持するの策を畫すべきの時也。中略、只務めて忍耐の力を極めて我が城壁を維持するを要すべきのみ。先哲曰否去れば泰來り剝極まれば復に逢ふ。是れ天下之常理也と。新聞社會の厄運も亦或は久しきに非るべきか。安んぞ知らん數年の後我改稱節に於て。一大快活の祝文を朗讀し。一大賀辭をのへ。既往の大不景氣大不愉快大不活潑なりし氣運を一夢境と回顧するの日有るを。云々、（此記事は十三四年の事に掛り、不景氣を說くは八九年の頃の事と知れ、）

見るべし當時錚々の諸新聞が具さに困苦を嘗めしの時にあたりて。獨り朝野新聞は未だ大に苦情を訴ふるに及ばざりしを。若かも幾許もなくして世の不景氣を後にして一大賀宴を開くに至りては豈盛ならず哉。翁が手腕亦察すべきのみ。

翁固より此を以て甘んずるとをなさず。益奮ふて報知、日報と鼎立の勢を持し。旗鼓堂々筆鋒前なく。社會は翁が蹂躪を免しぬ。蓋し翁の言ふところは暢達にして爽快。規世諷弊殆んど停止するところを知らず。細大漏らさず凡百の事件は悉く翁の筆端に上りぬ。加ふるに歐米より齎らすところの新智識を以てし。若かも鐵腸子の正々堂々卓說を紙上に躍然たらしむるあり。朝野それ起らざらんと欲すと雖も豈に得べけんや。翌九年二月十三日俄然物あり霹靂一聲鐵腸が頭上に落ちぬ。何ぞや鐵腸痛く法制官尾崎、井上兩氏を攻擊せしの故を以て。讒謗律にあてられて獄圄に下りしと是也。翁社長の故を以て亦與かる。蓋し翁は禁錮四ヶ月罰金百圓なりき。翁怡然として愁色なし。莞爾として笑ふて曰く。『百圓の罰金それ安いかな』と。飄然として家を出づ。嗚呼獄圄

に下るもの自ら負ふべきの罪ありと雖も。誰ありてか悲しまざるものぞ。而して翁や他人の故を以てして然かも憂へず悲しまず。豈に君子に非ずと言はんや。爛熳乎たる天眞實に翁が眞髓を伺ふに足らんや。余輩の崇敬するところのもの實に此にありて存ず。蓋し言ふ當時新聞條例發布より以來記者投獄の數最も多きの時と知るべし當時敢察の最も嚴酷なるとを。鐵腸が勁拔率直敢て他を憚らざるの筆鋒。俄然として御目玉を頂戴する。亦宜なりと云ふ可し。

當時獄内未だ監守なるものあらず。依然として幕府時代の獄吏にして。大半袴に麻裏草履を穿ち。優々緩々歩武を進むること遲く、亘眼烱々として炬の如く。苛察を知りて人情を解せざるの儕なりき。されば翁が洒々落々倜儻粗筮の性質。いかでか些事に拘泥して唯々たるを得んや。是に於てか獄吏の眼球を頂戴すると頻々「恐入候」と言ふと亦屢々なりき。幾許もなくして獄則一變。翁の所謂着袴時代なる者は夢と過ぎ。一月五圓の監守時代となり。獄則また始の如くに酷ならず。同月二十三日に至りては。既に左傳史記等を讀むことをも許され。或は互に交換し及び詩歌をうなりて獄中同業の者相樂むに至る。是に於てか翁洒落一番獄内話に記して曰。

僕の獄にあるや四閲月。其情狀前後大に變化あり。要するに始は否終は泰。前に凶後に吉なる者也。是即ち僕が怒少なくして喜多き所以にして。而して却て卿等に語る可き資本に乏しく。或は大に新聞紙のために失望とするや否やを知らざる也。若し之に反して事々凶大に否多からしめば。僕と雖も亦應さに一大罵詈を以て。卿等のために看客の喝采を買ひ得べきに。惜哉〳〵

と。何ぞ知らん翁獄中四ヶ月の間胃患になやみて。三度々々の飯は御粥なりしを。嗟翁も亦抱負の人なるかな。然りと雖も其言の爛熳として。句々皆天眞に出づるところ。坐ろに翁の風采を仰望せしめ。磊落放蕩却て掬すべきものあるを見る。

又曰。偶〻洗濯婆々の皺面を見ては。遙かに老妻の事を想ひ。囚繫の女子の垢面を拜しては。誤りて青樓の尤物かと疑ふ。

朝夜を粥糜に凌いて獄中に呻吟するの人にして。此言を出すを思はゝ。綽々たる餘裕豈に人をして景慕せしむるものなからずやは。

此年十一月五日。朝野新聞は竹川町の藪を出でゝ。天下晴れての銀坐第四街第九號に遷るに至る。翁の得意思ふべし。翁をして大に祝詞を朗讀して氣餒萬丈の慨ならしめしもの亦宜なるかな。これより翁の名江湖に普く。來り訪ふもの門前市をなし。遂に東京商法會議所議員に撰ばれ。東京組合代言人より日報社にかゝれる。名譽回復事件仲裁を托せらるゝに至り。廣く世人の依頼するところとなる。これよりさき。既に朝野新聞社内に花月新誌なるものを發刊し。翁自ら筆を執る。文人騷客爭ふて愛讀す。諸人又揮毫を乞ふもの多く。邸宅新に成れば則ち額面の揮毫を乞ひ。客遊旅舍に投ずれば地方の人群かり來りて揮毫を乞ふ。翁大に五月蠅しとなし。茲に一計を案して潤筆條例を布告す。其言に曰。

漁史一家條例

一凡潤筆不論紙の大小一文より千圓迄。

但し前金たるべきこと○書畫帖の如き小さな物は面倒臭き故。一切御斷りの事。

一親友の賴は此限にあらず。唯匁五分と雖も書く。然れども他人のものを自分の積りで書かせるとは嚴禁也。若し發露すれば罰金壹圓以上百圓以下を奪ふ。

一羊羹、金米糖の如き放屁的の品物は勿論。雞卵。鰹節等を以て潤筆に充つるとは。明治十三年一月より漁史の死ぬ迄之を禁ず。

庚辰一月

然かもその効なく。來りて揮毫を請ふもの日に益多く。條例を遵奉するもの一人もなし。翁笑ふて問はず又初の如くす。磊落粗笨事物に拘泥せざる概此類也。

是より先き十年西南の役起るや。即ち京坂の間を往來し。仔細に戰信を探りて新紙に投ず。當時電線の備未だ全からず。之れが詳細を探る頗る困しむ。此を以て京坂の間に往復するもの。前後其幾回なるを知らず。而かもその往來頻繁事務多忙にして。剩へ天下の人心恟々たるの時に當りて。坐右常に酒と妓とをはなさず。左手に杯を執り右指に管子をはさみ。諸方の文書を閲するの間。尙ほ喃々として雛妓を挑む。綽々たる餘裕亦欽慕すべきかな。英雄由來閑日月ありと稱す。されば翁を目して英雄となすは。余俄かに斷する能はずと雖も。亦偉大の人たるに恥ぢざるを思ふ。

是より以後大に政黨のために盡くすところあり。專改進の說を主張し。日夜經營據りて以て病を得。こゝに於てか手を政海に收めて遊樂を專とし。意を放ちて山河雲水の間を跋涉す。裁る所の詩韻積んで山をなし。北遊の吟草は別に集めて一冊となす。氣韻高品唐宋に泝るもの。諧談百出人をして阿然たらしむるもの。或は英雄の孤墳に涙を濺き。目擂る宿に家鄉を思ふ等。千態萬狀一律ならず。境に從ひ景に隨ひて筆下風を生じ紙上波瀾を起す。若夫盛夏炎熱の時欄に倚り清風を迎て之を繙き。破窓月は高く鴻雁一聲秋漸く老ひんとするの時之を手にせば。亦寒熱涼暑の何たるを知らざる也。已にして病勢大に漸み。明治十七年十一月三十日。年壽に滿たざるもの二歲忽然地泉の人となる。悲哉。本法寺內茲に香華の絕ゆるもの幾年。松籟空を拂ふて轉哀を送り。過雁月明に鳴て露したゝらんとするの處。一見白面の才子墓畔に佇むを見るの時あらんか。嗟悲哉。

（嗣出）

國學復興者としての契冲阿闍梨（承前）

理木乃翁

本論　第二　歌文

和歌、文を萬葉古今の古に溫ねて其姿調を古にかへし、今樣の詞を交へて巧に調和し、一種の歌文躰を創めたる、殊に永く跡を絕ちし長歌を復た起したるは、契冲の力なり。

長歌は萬葉集の比にのみ長歌てふ長歌を見るべくして、古今集比には既に振はず、其長歌も古五七なりし調は七五と變りて、今樣めきたるものゝ續きし後は、また古の長歌めきたるものも見得可らずなりぬ。短歌は新古今集に移りて風調いたく衰へ、二十一代集つぎ〳〵に出で來て、歌人各新奇を弄ぶに至り、世も亦萬葉古今と相距るに隨ひ、漸く下つ方にのみ下りゆきぬ。殊に定家

出でゝより詠歌を二條冷泉兩家に限りて、嚴格なる規則と煩雜なる法式とを設けて歌人を束縛すると漸く久しく、和歌はたゝ狹隘なる囹圄の裡に蹈り果てゝ、古の如く自由なる天地に美妙なる自然と幽玄なる人生とを歌はむとするものなし、今德川のやゝ前に出でたる三玉集を繙き見んか。

樵路日暮　哀にも暮にける哉重からぬ薪なりとも遠き山路を

寄歌述懷　色につき花になすなよさてのみぞ世にうもれ木の言葉道

かくては歌も千仞の谷底に墮落したるものと謂ふべし。文とても亦然り、近古に及びては俗語交り、漢文口調謠曲口調入り來るなど、純粹の和文所謂古文は影だに認るに由なし。

歌と文とが斯る有樣に陷りし世に生れて、そを救はむと思ひ起し、契冲は如何なる意見を抱きしか、如何にして濟はむとはなしゝか、河社（カハヤシロ）に就て之を見む。

いにしへの歌は譬ば畫師ならぬ人の堪能なるが用ある時物にまかせてかけるが如し、後の歌は畫師の書けるが如し、よけれども心より起れるは稀なり、人の儒ふに任せて草もゆるがず照日に汗も淋漓にて冬の繪かけるに、人を寒からしめ、埋火の下に衣を八重にかさねて夏の繪かゝんに、見る人涼しく覺えん人とは上手といふべきが如く、歌もそのたましひを籠めたらんをば古の人につげりといふべし。

或人古今の戀の歌はあはれに、新古今の戀の歌よきはおもしろしと申しき、よめるとつくれるとによれり。

契冲は古を慕へり、されど妄りに古を模倣せむとする者に非ず、契冲は歌の眞意を會得せり、歌は思想の表彰にして粉飾に非ずとを知れり、これぞ契冲が長流と共に儕輩の上に高くぬき出でし所以なりける。然り、さらば自は如何に實行せしか、今左に作例を擧げて照し見む。

春たちける日よめる　釋契冲

梓弓春來にけりと、久方の空しかすめば、あら金の土もたがはず、山の端の雪も消えそめ、水の面の氷もとけて、鶯のうら若き音も、梅が枝の其初花の、めづらしく聞ゆる時は、暮れていにし年の惜さも、忘られて今幾日あらば、野へに出て若菜摘ままし、子の日とて小松引かまし、青柳はいつかもえなむ、櫻花いつか咲かんと、人毎に待事多くなれる今日哉

こはやゝ古に復りし長歌の模型と見る可く、其無常歌に至りては滔々三百餘句三千餘字、いはむと欲する所をいひ盡くして餘蘊なく、誦み去り讀み來りて絕へて澁滯の跡を見ず、彼の徒に法則に拘らふものゝ荒膽をとりひしぎ、かく自由にこそあらまほしけれと誇示せるが如き樣あり。

春の花咲きて散らすや秋の月滿ちてかけすや咲ほどの何か閑けきみつる間の何か久しきかくしこそありけるものを空蟬の世の人毎に願ふらむ心やいかに紫の名高の浦による波の音に聞えていかるかやとのみ小川の流れつゝ萬の黃金千々の玉積てちさめむくらなしの濱の直砂の數しらてよき類にはなのめなる事たに添はす紅の匂へる顏は桃の花盛を讓り黑髮は雲に棚引きまよひきは霞のうちに山の端を思ひよそひて增鏡あかぬかたなく見てもなほ見まくほしきを飛鳥川淵瀨かはらす末の松波もこえしとさき竹のふしをあはせてちぎりつゝこまのわたりに作るてふ瓜のかつらの末遠くはひひろこりて足曳の山による虎雲に乘る龍の勢雷の四方をひゞかし吹風も

烈しくありてしけ山の奥さへつくし眞木柱ふとしきたつる殿の内にぬりゑゝかきて唐錦たるゝとはりは春よりも冬暖かに白玉をぬける簾は秋よりも夏涼しくて目もはるの庭の面には山つみのしらぬ山をし和田つみのしらぬ海をし水底には魚を住ましめ林には鳥を住ましめ朝には朝の遊夕には夕の遊長き夜は明してともす燈火を日影につきて更れとも更るもしらず秋の野の藤袴より春山の梅よりまさるたきものゝ香にしみかへる白妙の袖打振れは降雪の風にめくりて歌垣のたつる聲には大空の雲も漂ひ塵も散り水なき琴のしたひにも流るゝ音し琴ちにはむせふ音して鶯は古巣にあるを笛の音にそれもさゝつりもろともに醉をすゝめて酌みかはす玉の盃かきりあれはねふりの森の下やすく鴛鴦のふすまのやはらかに玉手さしかへ鳥の音のしきるもしらず日たけてもなほ起き難みかくしつゝいつともわかす苧環のめぐるが如く我思ふまにまにならば樂は何かはこれにすきの野のすきしと思へと春の花咲きて散らすや秋の月滿ちてかけすや（署）

短歌に於ては殊に自由自在なり。

山家　山里のおとろの道の青つゝら栗拾ふへき童たに來す

述懷　まきの屋に音たにたてぬ春雨の靜にて世にふるよしもかな

更衣　山吹の花色衣ぬきかへて白き一重もめつらしきかな

露　色々の玉ぬきみたる秋の野の花の千艸にゆらく朝露

祝　敷島や豐葦原の中つ國神代人の世うへそつきせぬ

佛教の問題をさへ捕へ來りて三十一字詩にうたへり。

自利々他、燈火を人の爲にとかゝくれは心のやみものこらさりけり

無常　消えぬ露死なぬ命のなき世とは誰かは知らて誰か知りたる

眞言宗　色もなき心のかたちいつかは見ん月にたとへて月もしかぬを

又古調の歌をもよめり、そは水戸少將婚姻賀に

とことはのとはのあにみにたくひなくなつさひそむるにほの雛鳥

ふたなみの思ひつくはにあしほ山そかひはかけしよそのうき人も

さかく長き短き古き新しき景色に情になべて思ふ事口をついて出でたらんが如し、されば長流が昔の人の見おかざる所を見出でゝ物名俳諧の歌に至りていひ殘せる事なく無常を述べたる長歌は其言葉のおほかなる事和歌の浦より千里の濱の眞砂をつくせり未だ我國に斯る長篇を見ざれば唐人の十年を經て成せるとかいふなるつふたつの賦にぞいひつゝくべき猶試に地に投ぐれば玉の響數しられず云々

と評せる中に玉の響數しられず」などはあまりに賛め過きたる辭ながら、「昔の人の見おかざる所を見出てゝ」久しき因襲を打破りたるとをいへるは誠に中れり、されど又木下幸文が詠歌は力にまかせられて一つの樣なるものから猶下れる世のさまなりかしといへるもまとなり。

和文の例は扶桑拾葉集遺文集覽などにあまた見えたり、こゝには唯一つ、

詠昇仙石和歌並序

伊勢の神宮河埼氏が家にたくはへたる昇仙石は世にいふ盆山とかなるべしとこよの敷波よする國にて長濱にしもひろへるにやと名を聞くに見る心地してつき〳〵し朝なる山田の原の杉木をば瑞垣の久しく聞きわたりて後相識れる事も亦年深しそれがもとよりこの頃せうそこするにつきてかの石に似べき歌一つよみてと請ふよしいひおこす腰折れかゝりたるものは雲の中に吠えけむ犬の跡たに追ふべからねどおはぶきやみする聲してあめうらになきぬてふ鳥のまねびすとさらにつたふべし

梓弓やたりのひしり世はなれしこや其山の草むさぬ石

萩原廣道の評に

契沖あざりの文すべてめでたし實にこの人よりあらたまりたる跡見えて細かなるが麗しきなりとあるが如く和文る躰は契沖に至りて一たび革れり、後の人はその道の栞を慕ひ來りしなり。今此章を終らむとするに臨み。二條冷泉專制の餘濁の中にたちて獨り清き源にかへさむとおゝ契沖が、當時の歌文はひとへに堂上の弄び物となれるとを慨みし其文の中の一節を抜出でむ。

況や萬葉集には民かたゐの歌をさへに載せられたるが後々の敕撰によみ人しらずといへるが中に此類少からじをや是皆心の種の草木に渡り言の葉の野山を分ぬによりてなるべし

文苑

追悼

安木田頼方

杉盛良太郎は、能登の國すゝの郡なる、野々江のさとの人にて、己いにしへとし此里にて、親しくをしへ事に物したりけるを、かの征清の　大詔のまに〳〵　皇軍の群に入つゝ、皇御國の御民等か特性なる、やまと魂振りおこし、彼國にい行きて、こゝに戰ひかしこに追ひ、こよなきいさををたてつゝ、いや進み進み、いや勤め勤め、いそしみて末終に、牛莊といふ市の街に追ひ至りけるに、齋宮の忌詞ならねと彼長髪（カミナガ）の賊とも、萬千の策とあるはぬりこめに、或は鍊瓦造の内にひそみかくりゐて、皇軍をたばかり伐んと、こゝをせに待たりけんを、こなたは將軍の指揮おそしと、待ちに待たる、ますら猛男ら、いで日本刀の光や見せん、日本男子の膽見せんず、けふはかりは清兵の例の得意なる逃足すなと。いさみに勇み雄猛して、打たをし切はふり、たはやすく賊を追ひ、牛莊の市をしめ得たりき、然はあれと皇軍もさすかに、いさゝ小川の、いさゝけくは、そこなはえつるを、あはれはれ、良太郎ぬしは、そか數に入りて、此現世の人ならず成り逝にしそ、いはんすべなく、せん便なく、いとをしく、いとなつかしく、いとあたらしく、いとかなしくこそ、されと、大君の御楯なる任重き、兵の道を全くして、　靖國神社に鎮りつゝ大御世を守らふ神のつらに入りぬ、とおもへば、心ゆくわさなるか中に、又かなしさやる方なくて

國の爲君か爲なる事しあらは身をもすてよとなとをしへけん

除夜おもひでの一節を

蓬生庵

更けゆく夜と共に、人の氣はひも靜まり、燈火の影かすかにまたゝき、撞きいだしたる寺々の百八の鐘の響の一きはあはれに心細ければ、文どもよみさして、何事をしてかは今年もと思ひめぐらすに、樂しかりし事のなか〳〵に忘られて、悲しき涙に袖のしほらるゝぞ是非なけれ、さるはとりいでゝ、身の徒なるが歎かるゝにあらで、無き人の來る夜ときけばなりけり、おのれ學びの道を踏みそめて、ゆくりなく故鄕をたちはなれ、み越路の此の里にさすらひしは、去歲の九月になんありける、流石に馴れぬ旅枕のひたすらふる里のなつかしく、日めもす夜すから、事につけ折にふれつゝ、東の空をながめ暮らせど、かへる山は名のみにて歸へらんすべもなく、厂金の翼に思のたけを聞えんにも先つは心のいそがれて、一ふしをだにえ盡せぬ口惜しきに、ふりはへて祖父君の老の寐ざめにもおのれを戀ひたまふるなどきくからに、愈よ心もあはたゞしく、暑中休暇にはと我から心をはげませど、明日をだに頼めぬ世の習のあへなさに、書きこめたまへりし歌文どもくりかへしてはかづ〳〵の心やりとなしつゝ、待ちつけて今年水無月の十日ばかりにわがやにはものしぬ、しばしは誰れ彼れうちつどふのみにて、かたみにかはす言の葉さへなけれど、何事もゑみのたねとなりしぞ、實にうれしきほどの事なりき、左るにても神ならぬ身の悲しさに、有る時はありのすさびに談らはで、慕ひまつりし人はその月の廿より五日の朝の露に惱ませ給へて、夕の雲がくれし給へぬれば、かけしたのみの甲斐もなく〳〵、習はぬ藤衣に朝な夕な奥つきの露うち拂らへど、土さへ裂けて照る日にも、逢はでは袖のほしあへぬぞ今更にて、盡きぬは涙の泉、はきて流るゝ月日もおもほへず、初秋風に驚かされて、およびをり數ふるに、のこる日數もいとゝ少なうなりつれば出立たん袖の涙の故鄕を、雲井のよそに忍はんことのせちなるをも、限りあればとて來ん年かけてたちかへりぬ、吹き結ぶ風は昔の秋ながら、袖の上の露のありしにも似ぬぞ、心がらにや、最中の月の隈なき光さへきり雲に蔽はれ、形見にのこる垣根の菊のながき世のためしもうらめしく、神無月の名こそ實にこそとおもひ知られ、何時よりもつれなく木枯の身にしむほどとは、あはれ悲しき秋風を、苔の下にて如何にきくらんなど、そゞろ露ふかき坂戸山(奥つき所なり)の忍ばれて、しぐるゝは冬の空のみかは、袖さへしめる夕暮に、伊勢人の暦もてありくぞ目覺しく驚かれて、

年月はへたつる關にあらねども暮るゝおもひは悲しかりけり」うち歎かれしは昨日のほどの心なりしを、呉れ竹の今宵ばかりにくれぬる夜も明け方の月影いと淋しく、軒端にたゆたふほどに、鷄の聲さへきこえ初めたれば、

無き人の來る夜とまつに甲斐なくも東明いそぐ鳥の聲かな」さては我が住む宿も魂なきの里よと、おもひ知られて堪え難きものから」

半日行

尺骨坊

小春日和の長閑きに興しきりに動き笠もかぶらず靴はきて瓢然貧庵を飛び出しぬ

見返れば板塀さむき木立かな

犀川の岸に沿ふてのぼる

冬川に轍のくぼむ小石かな

水涸れて石の合ひの落葉哉

渡し場に僧たゝづめり歸花

と即吟し獨り呵々と興がれば道ばたに枯枝などを拾へる老媼の遽かにこちら向くもおかゝ此所其所に草の家の蓆を以て風をふさぎ日あたりに娘の子が背の泣く子をゆすぶりて小歌うたひ寐小便の布團ほしたるなど中々に詩趣あり

土手下に草家のけむる小春哉

垣くちて西日に赤き冬つばき

村を出づれば野は一面に枯れ果てゝ畑に耕す人も見へず目の及ぶところ疊々たる萬山雪を被りて白し

冬枯や野道に殘る一軒家

かん〳〵と鉦うち鳴らし白木の柩を六七人の男女の守り來るは如何に貧しき人の野邊送りにやあらん物のあはれはこゝにつきたり

葬禮の錦らんひかる枯野かな

小高き處に木立ありて中に小さき古宮あり神は留守なるべし

時雨つゝ留守もる宮の冬木哉

朽椽に腰うちかけて酒にはあらぬ腰の煙草入李太白にあらざれば中々の苦吟蓋し發句にはならざるべし

古池の隅にあつまる木の葉哉

御陵や畑のなかのふゆ木だち

裏山は半分照りけり時雨けり

遂に

寒き日に御酒盗まれぬ樣にせよ

と出鱈目を殘してこゝを辭し天德院を訪ふ

古寺の湯殿につもる落葉かな

石引町に出づこのごろの定めなき空うち變はりて吹く風は梢をならし砂をとばす木枯のすさまじさに今までの興もうち忘れ帽をおさへ顏を蓋ひてひたすらに途を急ぎぬ

凩に吹きまくらるゝ烏かな

歸り來れば日は百萬石の城跡に落ちて淋し

城跡や高石かけの冬木立

寄國祝　木村竹治郎

たかさこの島守るひとも祝ふらん君が代千代とゝしのはじめに

寄山祝

富士よりも高き御嶽を得てしより國の御稜威も世にそひえつゝ

寄海祝

和田つみの千尋の底のいろくづも時得てあそへ御代にあひつゝ

新年眺望

ひさかたの空にたなひく雲もなく美都のはしめを祝ふのとけさ

寄山祝　安木田賴方

大君はかきりもあらすはるあきに富みのを山の名もはしきかな

ましたといふ草を手折りて

君をいはふたみの心のもろ向きをもちひにしきて年をむかへつ

雪中早梅

なにことものこくれぬ御世のみてぶりとゆきがてにさく梅の初花

社頭雪

千木高く仰かれそするあつかやの眞屋のあまりに雪はつもれど

寄山祝　香村茂富

動きなき御代のすかたとかくれなき雲の上なる富士をこそ見れ

筆

やき太刀のさやにをさまる御代なりとみ民は筆の束をこそとれ

風光日々新　草野正義

雪きえて梅こそけふは笑みそめぬあすうくひすや初ねたつらん

元旦　戸村義保

ともかくもほゝ笑まるゝぞ新玉の年たつ今朝のこゝろなりける

偶感　河原始二

横によむとつくにひとはさとりえじ神代なからのなほき道をは

泣き笑ひよろこび怒るうちにこそ過き行きにけり世々の民くさ

蟻の宮

在文科大學　太郎樓主人

鎌倉山に照りし月　いつしか缺げて後の宵

雨に友喚ぶ鳩のこゑ　村雲くろみなみたかく

寄ては返す由比が濱

室町御所に咲きし花　あらし誘ひて散る晨

鴉の入江にかりの聲　葦の穂白みかぜさむく
寄邊定めぬすて小船
槐が下の蟻の宮　角ふりわけし蝸牛の
夢かうつゝか白眞弓　とらねば人の數ならで
とりて果敢なき武士の
消えてあとなし草の露

俳句

松風に音羽の瀧の氷柱かな　吐虹
冬の川古城の裾を流れけり
冬ごもり由ある寺の一間哉　樂園
痩がらす西へ東へ雪のくれ
足跡の氷りてつゞく冬田哉　豆男
寒聲のふるへて渡る鴨の川
日あたりや磯屋の裏の冬椿
日は西に石段の上の落葉哉

名にしおふ北國の雪をはしめて見たる嬉しさに小さき詩囊をさぐりて雪百句をものせり苦吟中々に興ありき其中

雪晴れて女顔たすふねの窓　秋竹
御陵の雪にうもれる麓かな
岡の邊に茶沸かす雪の小家哉
谷合に家あり霏々と雪かぶる
土手下に雪に埋れる小家哉

讀梧陰存稿

村上函峯

客冬十二月。門生某。來示二余梧陰存稿一。蓋故文部大臣井上毅公之遺稿也。一夜積雪滿レ屋。峭寒沁レ骨。不レ能レ睡。偶取讀レ之。肅然起レ敬。徹夜卒レ業。嗚呼公値二遇中興一。起二於布衣一。歷二任庶職一。終列二大臣一。職在二文部一。設施措置。皆有二本末一。敎化大興。其功績顯著。世自有二定論一。今不レ贅焉。而此稿載二和漢文四十一首一。詹々小冊子耳。然碧海柴氏曰。傳レ後之文不レ要レ多。畢生得二三十篇一。則足矣。唐孫樵以二當時名匠一。所二自定一。不レ過二三十五篇一。公之文亦類二於此一。其和文。則俗而不レ雜。雅而不レ腐。明暢平易。法極整嚴。格極謹密。敘事質直。議論正確。視二之白石之富贍。鳩巢之精覈一。則別開二一種法門一。足二以爲二國文之軌範一矣。其漢文。則結構布置。一字不レ苟。議論開創。識見超拔。輓近儒家。有二此文字一。而無二此卓識一。且若二世道論孟軻論一。則非レ韓非レ朱

非レ陸非レ王。自是一梧陰先生之文也。要レ之公之文。憂國血誠。自二肺肝中一流露者。豈以レ文求レ名者所レ及耶。安子順曰。讀二孔明出師表一而不レ墮レ淚者。其人必不レ忠。珍休曰。讀二此稿一而不二感憤一者。其人必不レ誠。方今奎運方旺。文學盛行。其著作布レ世者。汗牛充棟。然概優孟衣冠。摸擬竄竊。未下嘗見中能出二機軸一者如レ此。孔子曰。有レ德者。必有レ言。嗚呼信矣。

忘年會小引

蓉湖　浦井　信

歲杪設宴。俗謂之忘年會。蓋忘舊歲迎新年之意也。或曰。貧人苦責債。借以忘窮年耳。歲之乙未十二月某日。予與二三友人。倣俗例。以開此會。因曰。年有可忘者。有不可忘者。少長相忘。以希得益。吾之年可以忘也。喜壽懼衰。以竭愛日之誠。是父母之年。不可以忘也。若夫今歲。王師掣長鯨。而尨也吠。虎也視。善後之警策。亦決不可忘也。而今也予輩相會。以忘年。無不可歟。抑有說也。越俎議事。忘位也。匪材希用。忘分也。嗚嗟。吾儕。已非其任。又無其材。然則。忘年之會。不亦可乎。皆曰善。於是。縱酒放言。浩々乎。忘天地之爲何物。豈啻忘年而已。既起曰。杜詩不云乎。清談見滋味。爾輩可忘年。可忘者年也。不可忘者雅藻也。各賦詩而散。是爲小引。

新年作

蓉湖　漁史

遷鶯猶未告年新。只見天花散玉塵。幾點盆梅一杯酒。白醴々裡有青春。

偶成

灞橋驢背剡溪舟。底事詩人誇雅遊。長劍倚天須作賦。雪封西伯利阿州。

未開梅

香陽　陳人

珠蕾春通未發時。東風寄恨在南枝。忍寒高士避名久。含笑佳人欲語遲。雪綴林梢禽錯認。樹無花影月如痴。可憐何日濃粧整。焯灼春同夢裏姿。

貧女吟

爲誰貧女入秋驚。衣薄新寒如水清。隣女空聞嫁裳理。垢顏翻恨鏡奩明。烏飛向暮城邊宿。蟲織代人機下鳴。夜夜空房淚如雨。嫦娥依舊照無情。

吊岡孤竹

風雨凄然晚未收。蘭摧蕙破欲添憂。空爲白首同歸約。忽看青山埋玉秋。愁夢茫茫懷往事。音容歷歷集心頭。篋中遺稿不堪讀。回首南雲雙涕流。

憶小舟子

人生自古愴離羣。況復窮陰萬緒紛。白雪輝窓常忘曉。青山入眼忽思君。天眞發露才華美。學海茫洋日夜勤。一夜月寒眠不得。疎梅庭裏暗香聞。

歲暮感懷

暮年無計豁胸襟。妄慣人時感不禁。咄咄書空多恠事。嗚嗚擊缶動狂吟。美人名士他時土。黃卷青燈萬古心。起對嚴城更鼓寂。霏霏陰雪斗牛沈。

新年口號

默天庵

北地迎新詩思催。江南春色入懷來。枉侵殘雪探東塢。也有寒梅處處開。

雪後

雪後觀方異。縱眸落照間。鏡磨青一水。玉削皎千山。烏尙迷栖叫。舟初破浪還。或疑入境別。茅屋玉斑斑。

歲暮　狂顛子

客館歲云暮。憂端亂似雲。鄉風寡入和。獨唱一杯醺。閱籙心空笑。摧毫手自焚。塵牀寒夜燭。枉照送窮文。

季冬殘菊

千載淵明去。于今菊尙芳。向人標晚節。壓雪傲寒香。松柏眞同調。蝶蜂無復狂。笑他桃李輩。與汝本參商。

元旦　晴雪生

雞聲腷膊報新年。風暖雲晴曉色鮮。學語黃鶯先出谷。呈祥白鶴舞飄天。窓前拂几迎初日。堂上稱觴帶瑞烟。不羨唐虞三代事。四民相會醉儜々。

鍾吼雞鳴入曙光。祥雲瑞靄望蒼々。欲將佳宴迎青帝。先舉升平第一觴。

初冬早起　春風子

月影西傾曉色新。宿鴉相喚報清晨。起推牖戶銀滿地。庭樹着花頃刻春。

雪後月窓　仝

雪光照徹壓錢釭。聞就犬兒守戶尨。獨坐爐頭閑温酒。寒風凍月入書窓。

雜錄

法窓餘錄

在法科大學　乾燥生

乾燥生は其名の如く其質も亦乾燥なり從ひて其文章も乾燥なれば文章の材料も亦乾燥なり今これを美麗優雅の文多き雜誌に投ず徒らに妨害を好むに似たりと雖ども其實然らざるなり其理由はと問はゞ説明頗る易々たりといへども强て此處に記すべき義務も必要もなく何人も亦之を記せしむる權利なし呵々

(一)帝國議會は會期中に非らずして之を解散しうるか

甲曰く　解散とは單に議員の衆合しあるを解き散ずるの義にあらず併せて議員の資格をも剝奪するものなり換言すれば解散は議員に對する免職なり故に何時にても之を行ふことを得べし會期中と否との如き之を問ふことを要せざるなり

乙曰く　解散は議員の免職にあらず解散は文字の示す如く議員の會合しあるを解くものなり唯其結果として議員の免職生ずる耳然らば解散は會合中にあらざれば之を行ひ得ず

甲曰く　議員の會合を解くの結果議員の免職生ずとは解し難し單に會合を解きたりとて何故に議員は免職せらるゝや理なきの言なり察するに乙論の趣意は解散とは帝國議會其者を解散するとの言ならん何となれば議會其者を一時消滅せしむれば其間には議員

たるものあるべき理なく即ち議會の解散は議員の免職の原因となればなり

果して然らば議會は憲法の存する限り永久に存せり立法機關は一日も欠くべからず依て知る解散とは議員の免職と解するの外他に解するの術なし

乙曰く　議會の永久に存すと否とは余の論の主旨にはあらざるが假りに之を永久に存すとするも余は尙ほ解散其者を議員の免職なりと解せず解散とは召集せられ開院せられたる其集合躰(假へば某年の議會)を解きて召集せられざる前の有樣に復するをいふなりと主張すべし其結果議員の免職となるは是れ法律の明文が然らしむるに過ぎず此の如き明文なければ議員は免職となることもなし而して此明文を生じたる立法上の理由は別問題なり

甲曰く云々　乙曰く云々

(二)條約の執行に依る法律の變更に對し帝國議會は其協贊を拒むことを得るや否や(我憲法上)

甲曰く　本問に對して是非共國際法上よりも看察せざるべからず國際法に於て條約は主權を束縛す主權者にして已に束縛せらるゝならば其機關たる議會は其服從者たる臣民も共に束縛せらるゝと當然の結果たり已に然らば本問に對しては消極論を執らざるを得ざるなり

又國法上より見るも憲法十三條に依り天皇は隨意に條約を締結し以て國家を束縛し得

乙曰く　獨り憲法第十三條のみを見て其他を見ざるは盲目同然たり帝國臣民は立法事項として憲法に定むる事項につきては法律に依るにあらざれば之を變更せられざることを憲法上に擔保せられあるなり唯法律のみ條約と雖ども此等の事項を變更し得ず而して其法律はと問はゞ議會の協贊を經ずんば之を變更するを得ざると(第五、第卅七條)に依り明白なり不知甲論者は大權を以て立法事項を犯さんとするか

丙曰く　甲、乙二論者共に片眼者流なり余は確信す憲法第十三條は第卅七條にて條件附けられたる規定たり詳言すれば主權者は豫め議會の協贊を經然る後に條約を締結せざるべからず何時にても勝手に締結するとは憲法の論理解釋として許さゞる所なし斯の如くにしては甚だ迂遠なる手續を要するが如し殊に條約の如き秘密又は迅速の性質を帶ぶるもの少からざるものに在りて此手續を執ると拙なるが如きがそは政治論なり

丁曰く　丙說は窮せり且つ丙說の論法を執らば第卅七條が第十三條に條件附けられたりとも解し得べき次第ならずや法律の明文が何とも言はざるに斯る解釋をなすとは贊せざればとて今日結びし條約を議會が協贊を拒みしことを理由として變更若くは破約を申出すと能はざることと國際法上然るところなれば不得止消極論を執らざるべからず云々

十日菊の記

韓　錢

嶺　村　與　桂

朝鮮在來の貨幣は日本人呼で韓錢といふ、形質吾寛永通寶に似、表に常平通寶と銘せる圓形方孔の銅錢なり、其通貨として全く零位の位置に止ることは、今更事新しく經濟學上の理論を擔ぎ出すを待たずして知らるべし、

運搬の不便なるは勿論ながら、其質量と價格にして凡一定せるものならば、暫く之を恕するを得べしと雖、如何せん歴代の政府が淺ましくも貨幣鑄造を以て一の營利事業となし、一定の鑄型を用ゐずして、思ひ〳〵に利益ある方法を執りし結果、粗惡の品相踵で顯れ出で、もとは一分錢と五分錢との二種類ありしなれども、今日に至りては各種に就きて大小輕重粗密、凡そ幾十の階級あるか知るべからず、五分錢にして却て一分錢に劣るものあるに至れり、例へば五分錢にして一枚吾二匁半を出づるものある傍には、一匁四分に過ぎざるものあり、一分錢も亦一匁五分五厘のものより一匁のものまでに並べらるべく、特に前年閔泳駿が平安道監司たりし時鑄造せし俗に平壤錢と稱するもの〻如き、僅に八分内外に過ぎず、此の如き有樣なれば兩種間の隔壁は全く壞れ、今日終に五分一分悉く同價の價格を以て通用せらるゝ、敢て怪むを要せざる也、

其稱呼は如何、此銅錢一枚を凡て一分とし、十分を一錢とし、十錢即一百枚を一兩とす、兩は朝鮮貨幣の單位にして以上數十百兩と計算す、然れども日本人は皆兩錢分を稱へずして、一文十文百文と算へ千文を一貫文と稱し之を單位とす、而して此文の計算法は地方によりて二種の別あり、京畿道(京城仁川等)にては韓錢一枚を五文とし、十枚を五十文、百枚を五百文、二百枚即二兩を一貫文と算すと雖、其他にては一枚を一文、十枚を十文、百枚を百文、而して千枚即十兩を一貫文と算するを常とす、故に釜山にて一貫二百文の韓錢を仁川へ持行かば、則六貫文と數へらるべし、之を表にあらはせば

韓稱	(韓錢一枚)	(十枚)	(二百枚)	(千枚)
京仁	一分	一錢	二兩	十兩
釜山	五文	五十文	一貫文	五貫文
	一文	十文	二百文	一貫文

凡そ邦人と朝鮮人との間の取引は、金巾數百反と牛皮數千斤との交換より、大根一本の賣買に至るまで、皆韓錢を以て直建をなす、故に韓錢と吾貨幣との間には自ら相場ありて、何時にても彼此相交換するを得べし、其相場を稱して錢割といふ、而して價値なるもの〻常として、此錢割も商況上需要供給の度に應じ、時々刻々動いて休まざるなり、

錢割とは韓錢の單位即貫と、我が貨幣の單位即圓との比例なり、一貫文を吾四拾六錢(京仁地方の一貫文即二兩を)と換へ得べしとせば、錢割は四割六分なりといひ、二圓二十錢(釜山地方の一貫文即十兩を)に換ふべき相場なりとせば、其錢割は即二十二割なり、而して貫の算出法に二種あるが如く、錢割も京畿道と其他と自ら相異なり、等しく韓錢一千枚を以て吾二圓(二百枚を四十錢)に換ふへき相場なりとするも、仁川にては錢割を四割なりといひ、釜山にては二十割な

りといふ、苟も朝鮮貿易に關する書類を見んとする者は、是非とも此差別を辨へ居らざるべからず、

錢割は時々高下ありと雖、開戰以前は概して京仁地方の三割即釜山地方の十五割を僅に上下するに過ぎざりき、昨夏我軍隊が內地に入込みて需供の權衡を失ふや、一躍して五割（即二十五割）に騰り、今春以來漸く下降に向ひたるも、今尙四割（即二十割）を上下し居れり、即凡そ韓錢二百枚を吾四十錢、一千枚を二圓と交換し得べきなり、

昨年八月施行の新式貨幣條例には、新鑄貨幣を五兩（吾一圓と同質量）一兩（吾二十錢）の銀貨と、二錢五分（吾五錢）の白銅貨と、五分（吾一錢）の銅貨と、一分の黃銅貨とに定め、而して外國貨幣と雖右の朝鮮貨幣と同質量を有するものは、各同樣に流通を許す旨を規定せり、即吾一圓は五兩銀貨と同質量なれば韓錢五百枚と換へ得べく、二百枚が吾四十錢に當り、恰も前述の四割の相場に適へるなり、蓋しこれ適當の標準價格なるべし、

然れとも是は政府の歲出入等に適用すへき條例たるに止まりて、實際の商業上に於ては、錢割の常に上下するを免れず、特に新鑄貨幣は其數甚少く、いはゝ單に見本に過ぎずして、一般の國民は之を知らず、開港場にては日本の貨幣に混じて通用するもの少からざるも、肝腎の朝鮮人が日本貨ならは信用して受取るに自國新貨をば却て怪で憎惡するの奇觀あり、

貿易商等が百貫二百貫文の多額を取引する場合に於て、之を一々幾萬幾千枚と數ふるか如きは、到底爲し得へき事にあらざるを以て、双方の相談上全額の十分一若くは二十分一を出して之を檢し、若し過不及あれば其差額を十倍若くは二十倍したるものを別に受授するを例とす、又韓錢十兩即一千枚は凡吾一貫三四百匁の重量あるを以て、大躰上の計算は秤量にても知るとを得べし、

吾居留地にては商人相互の間、韓錢手形なるもの發行せらる、假へば一韓商ありて牛皮若干を積み來り之を金巾に代へんとするに、牛皮を買取りたる店に金巾なき時は、其店は某金巾商に向け牛皮の代價額だけの手形を發し、韓商は之を携へて金巾を購ふを得、而して手形面には之を持參する人へは何時にても表面に記載せる韓錢を渡すべき事を記せるを以て、信用ある商人の發したるものは、殆紙幣同樣の効力を有し、轉々流用して非常の便益を添へ居れり、

韓錢の重笨なるより、第一に困難を感ずるは、內地旅行の客なりとす、吾十圓に相當する韓錢を携へんとせば、少くとも六貫匁の重量あるを以て必ず人足一人を雇はざるを得ず、固より內地物價の低廉なる、尋常漫遊の輩は一月の旅に五六十兩も携ふれば足れりと雖、貿易品仕入の爲數百兩の韓錢を馬に載せ人に負はせて、內地に入込むが如きは實に容易の業にあらず、思ふに此貨幣制度の依然たる間は、吾居留貿易商に大仕掛の貿易を經營せんことを勸むるは少しく酷ならん歟、

（韓錢終）　十一月二十五日稿

岩崎法賢先生の柔道に就ての演說

吐虹生

雜報欄內に記したる我校柔道部新年會の席上に於て柔道師範たる岩崎先生は一場の演說を試られたり當日余は發起人の末席を汚したるが加ふるに編輯員として列席せし義務を以て殊にこゝ

に先生の演說を筆記する所以也若夫粗漏に失し不文に陷るが如き者あらむ歟皆是筆記者たる余の罪を負ふべき所性來の忘癖はあらかじめこの事を謝す

諸君は我柔道部の熱心者にして、寒暑を厭はず日々無聲堂理に出入し、身を鍛へ心を練り健全なる神州の民となり、他日大に邦國の爲めに盡さむとする人なり。諸君は既に柔道の効能を知りて而してこれを學ぶ以上は、余の不辯を以て今更喋々するの要なからむも、世人の滔々たる幾多の批難をこの道に加ふるものあるに於ては、其批難が果して的中せるや否やを辨するは、或は徒爾にあらざらむ歟、請ふ條を設けて且らくこゝに說かむ

第一　概世人の柔道に對する批難は危險なりといふに歸せむ。危險とは所謂怪我多しとの意なり。而もこれ畢竟論者が古來柔術の沿革を知らざるに因る、古來の師範家と稱する者に聞くに、昔は他流と試合をなすに當りては、殊更に其の腕を挫き或は足を折ることをなせりと、これ實に柔術に怪我の多かりし所以なるも、今日の天下誰かまたこの蠻風を行ふ者あらむや。故に柔術を見て以て危險なりと說くより寧ろ當年の風習の危險なるを說くの、勝れるに如かず。なほ疑はゞこれを近年の實例に徵せよ、柔道の爲めに一生を支離者として過せし者ある歟、稀に膝頭を傷くるが如き者あるも、蓋しこれ獨り柔道のみにはあらざる可く。世間幾多の運動法に於ても、かくの如きことは先づ有り勝なる可し。これをしも尙危險なり怪我なりと云はむ歟、何を以て氣力を練り身躰鍛へんとする。桑原啓一なる人が日本新聞の上に、我柔道を批評せしが如き、思ふに識者の一笑に値せざらむ。

第二　危險なりといふ批難に次で起る者は、激動といふ事ならむ。夫れ激と不激とは、其人の躰力に就て決せざるべからず。一樣に呼で激動なりといふ者あるに於ては、余は直ちに拘子定規と云ふて不可なるを見ず。況んや柔道の如きは其人の躰力に因り、尙よく加減し得べきものに於てをや。さはれ少しく激しき運動を其身躰に加ふるに非ずむは、到底身躰を練磨するに足らざるなり。見よ彼の封建時代、武道の盛なる當日に於ては、士人の身躰如何に健全なりしぞ。これを以て今日の書生が顏色憔悴し、辛艱を擧る氣力に乏しき者に比すれば、其優劣果して如何。以上の二つこそ、我柔道を批難する論點ならむ。これに添ふる顏色蒼白の說の如き、請ふ次手ならばこゝに辨ぜむ。柔道を爲す者は顏色蒼白となるを、あゝこれ何等のことぞや。これを余が眼に於て見るに、顏色の蒼白なるは寧ろ、運動を好まざる人に多きが如し。よし一歩を讓りて柔道を修行する者の、顏色をして假りに蒼白なりとせむ歟。我輩の顏貌は美術品にあらず玩弄物にあらず。蒼白赭赤何んぞ關せむ、唯身躰をして强健ならしめ心膽を鍛冶し以て生存の我目的を達すれば可なる而已。

以上の諸ろ、これを分拆するに畢竟論據なき、經驗なき批難たるに過ぎず。よし余は今これ等の批難を打破し終んぬ。妖雲を排せり、日月星辰森然として羅列す。光輝射るところ、抑も何等の現象を呈する。希くは余をしてこれを說かしめよ。

人として艱難辛苦に勝たんとする者は、豫めこれに堪ゆるの風習を養はざる可からず。然かれども人の性質として自から好んで、斯かる素養や修行を爲す者は稀也。而かも柔道を修行せむとする

に當ては、寒なりとてこれを避く可きにあらず、暑なりとてこれを厭ふべきに非ず。一枚の稽古衣を着けて、この雪天地に修行するが如き、一種の勝負心に勵され人をして知らず識らずのうちに、この良性を附せしむる也。精神膽力の練磨の如きは世既に定論あり、故に今更贅言を要せずとするも、其他の諸利益はこれを述ぶるの妨なきを信ず。時間の節減、これ實に多忙なる今日に於て缺くべからざる者也、柔道は他の諸運動に比して、僅かの時を以てよく諸機關の作用を活潑にせしむ。觀察注意、日頃の稽古に於て常に養成せらるゝもの、また必ずしも文藝の特有物たらざるを信ず。

而も深く考へ高く慮るに於ては、武藝の修練の決して漫に看過す可からざる者あるを知らむ。粹然たる神州の國躰は、如何にして創められ、如何にして續きしぞ、彼の大和魂を以て滿たされたる我々の祖先が萬世一系の皇室を戴き、外敵國の侮辱を蒙らず、內民衆の氣骨を鍛ひたる者、實にこれ武を以て其心髓となせし者あるに非ずや。其創められ其續きし所以を思へは、益國勢を擴張し稜威を隆盛せざるべからず。而もこの般の義務悉く懸つて我輩の双肩にあるものを知らずや。あゝ神州男子の心魂は神器天叢雲劍の示し給ふ所、豈に一朝にして忘却し去りて可ならむや。人は云ふ、健全なる精神は健全なる身躰に宿ると。然りこの健全なる身躰を作るに非ざるよりは、焉んぞ健全なる國家を作ることを得む。誰れか國民として自國の强固を希はざる者あらむ。而も其基本たる健全なる身躰を思はざるに至ては、それこれを何とか云はむや。

唯夫れ柔道を修行する者にして往々其技に誇りて、粗暴の行爲に渡るあるに於ては、最も深く謹まざる可からざることとなり。老子云はすや良賈は深く藏して虛しきが如く、君子盛德あつて容貌愚なるが如しと。凡て何事によらず初心者の癖として、頻りに其技藝に誇るものあるは、蓋し識者の笑を免れざる所也。昔しは石田三成が天下の大擧一朝にして潰え、德川の面前に縛せられし時、諸將多くはこれに嘲弄を加へしも、獨り淺野長政は彼れの心事を憐れみ、懇懃之を遇して、頗る令聲を後世に殘しき、それ武藝を學ぶ者は長政を則とせざる可からず。何ぞ妄意に其武藝を弄するとあらむ。然りと雖、苟も自家の權利、身躰、財產、名譽等を侵害せむとする者あるに至ては、寸步もこれに假借するところなくしす可矣。百代の能辯家シセロー云はずや。自己防衛は天理の命ずる法律也と、この時に當ては有形無形の防衛を以て抵抗するある而已。これ即ち我が固有の權利を行ふのみならず、亦固有の義務を盡すものと云はむ歟。又人性の弱點として躰力を練らむと欲するが爲めに、學科に怠りを生じ易しと雖、其人の注意反省を俟ちて匡正するは蓋し易々たるのみ。而も以上の二條は、余が一片の婆心諸君の爲めに慮かること深きの致す所也。諸君は堂々たる高等學校の學生、豈にこの事あらむや、唯余が杞憂に止まる而已。

人生概ね四五十歲に至れば、氣息奄々として所謂彼の隱居ふる者となる。此時に至りて尙ほ青年を凌ぐべき氣力と躰力とを具備し、益々奮ふて邦國の爲めに盡す者ありとせば、嗚呼これ何等の快事ぞや、諸君希くはこの心を持し、健全なる身躰と健全なる思慮と、加ふるに健全なる心膽を練りて以て神州の幸福を計れ。

予が冬季休暇に於ける遠足

石伐山房主人

第一、舊臘廿六日、凱旋の第六聯隊を手取河畔に迎ふ、携ふる所の日章旗下整列する者六人、三稻、河、鶴、中、春、制服制帽端然として一隊毎に軍隊萬歳を呼ふ、馬上の老將軍是れ誰、飯森少佐、莞爾として曰く遠方の所態々と、將軍の答辭ある蓋し異數なりとす

第二、同廿八日、大暴風雪を犯して鶴來に遊ふ、途に一閑院不動尊在ます、之を守る和尚頗る變物、曰くよく御參詣、壯士日本魂を鍛る積りならむ然れとも此の寒氣、如何なる日本魂も凍らさるを得す、愚僧請ふ爲めに藁火を燒かむと、暖を取る、曰く我廿五年の十一月始めて此處に來る、小寒に入るの日洗足裸頭村中を叩鉢せむとし四大凍結の爲め果さす、大寒に入るの日草鞋を穿ち頭は裸にして村里を徘徊す、霏々たる降雪頭上に積むて溶けす、此の如きもの三日、村翁村嫗相語りて曰く今度の御上人はエライ御方ぢやあんなに御修業なさる御方は又とあるまいと、信徒の信仰日に增して盛なり、見よ此の建築を未た落成せされとも費す所既に百四十圓固より皆信徒の喜捨に由る、苦行難難豈に妄りに爲すものあらむやと、將さに辭せん燒くことを止めよと云へは對て曰く此藁は信徒の送る所、送るの當時既に卿等の爲めに燒くの因緣定まれり他事に用ゆ可からす、且つ夫れ人の家を訪ひ趣盡きて歸るは面白からず、今暫らく〳〵と抑留せるゝ時に歸る、趣や限りなしと、即ち辭謝して出て顧みれは門戸に倚るの一僧猶丁寧に長揖せり

鶴來店頭掛くる所の兎と「ムシナ」と兎一匹の肉代二十錢、「ムシナ」二十三錢而して「ムシナ」の量殆んど兎に三倍す、脂肪多くして悪臭甚だしきは其廉なる所以、雪中四里を蹈破してスキ鍋を擁す、臭も無臭も問ふに遑なし、好漢其味を知らずしてかならむや、同伴又六人瀧、大、石、元、森、河、

第三、正月四日、同人ボートの漕き初め、天大に雪らむと欲して降らす、寒氣風に凝つて肌裂かむとす、須崎橋下冷飯を嚙むて大呼勢を助けし者、想へば快哉、同伴又々六人瀧、元、河、木、大、齊、

第四、同十二日、再び鶴來に遊ぶ、「シクマ」一匹肉代五十錢、六七百目の肉殆んど皆是れ脂肪、而かも美味遠く兎、「ムシナ」の上に在り、牛に慣れざる人の「シクマ」の方旨しと云ふ或は然らむ、然れども脂肪のみを多食して濃味なるに飽くなかれ、地音「シクマ」と云ひ「シクマ」と云はず、知らざる人聞て熊となす非なり、同伴又々六人齊、大、瀧、河、元、佐、降雪の日一日を隔てゝ行かむとの約恰も之を十二日の日曜日に得たり、即ち休暇後と雖ども此に附記する所以、

劒術名人法（第參號の續）

南山不息生

○同流稽古中に撰り嫌ひを致すものあり箇樣のものには迚も劒術の上達は六ヶ敷きものなり決して左樣のことなく相手六ヶ敷く難劒なるもの又は向ふ達者にて自分の手に合ひ兼ぬるものは外々の者よりは數掛け一日中に二度も三度も繰返し〳〵勤め勉めて稽古すべし後ちには甚だ遣ひよく

成るものなり故に撰り嫌ひをば稽古上達の大害と知るべきことなり

○目當は成丈大きくつくべし諺に棒ほど願ふて針ほど叶ふと云ふことあり兎角目あては甚大事也先づ昔の名人上手と呼ばれたる人を目當に致し又當時の上手達者なるものを目當にして夫を打込み打据ゑ日本全國の劍家を打從へ天下の一人劍聖と呼はるゝやうにと心掛け修行すること肝要なり

○稽古に誂へをして遣ふと云ふとあり右は人の稽古を見て此人は箇樣の處に得手あり彼人はかくする癖ありと云ふことを能く〳〵見覺えおき其人と立ち合ふときは其得手を外し或は受け又は切り落し全勝をうるやうにすべし能く氣を付て見覺えおくを善しとす

○此方年來門人を試めし見るに手の內堅きものは多くは無器用にて器用のものは少なきものなり先づ太刀の持ちやうは第一小指を少しくしめ第二紅さし指は輕く第三中指は猶輕く第四人さし指は添ゆる計りなり箇樣になくては敵に强くは當らぬものなり

○此方塾生共の樣子を見るに何れも一向に修行慾と云ふものなき摸樣なり此方修行中には大に其慾ありし故今日に至て其方共に稽古心得方の咄を致すやうになりたるとなり依て藝道には慾と云ふもの有て宜しきとなり

○平日の稽古には業を種々致し何一つ出來ぬと云ふとの無きやうに手練すべし扨すたるとを要す捨たつて業を色に致し其上負るとも是非に及はず右の如く何ほと負るとも少しも構はず修行せねは業の美妙に到るとなし上手名人の場に進むとかたし相撲なとも業を色々致し負るとも決して弱手と致さぬよし劍術も其の如く業を種々いたし負るとも決して耻つべき事にあらず忌む可き事に非す

○鞘を持ち立ち合へば直くに切先にて向ふを責め出れば突くぞと云ふものを持ちて遣はねば成らぬとなり兎角切先いらつく樣にきかねば向ふは少しも恐れぬものなり

○當流に稽古中氣は大納言の如く業は小者中間の如くすべしと云ふ敎あり甚だ面白き意味なり勘考すべし

第二　一刀流秘事

○一刀流劍術元祖伊藤一刀齋より傳はりたる組太刀は○佛捨刀○刄引○相小大刀○表の組○越身までにて傳書は本目錄皆傳の二つなり其門人小野次郎右衛門忠明に至て小太刀の組太刀五本增加せり傳書は初目錄かな字等なり右初目錄は一刀齋の時代には稽古場に張り置き平生門人に示したるよし忠明に至て目錄と唱へ傳書に致したるなり當時本目錄と唱ふるは一刀齋の初目錄のことにて本目錄は當時皆傳の節渡すことに成りたり二代目次郎右衛門忠常に至て組太刀の○切落○同二本目○寄身○開○右四本發明せり三代目次郎右衛門忠於に至て○合刄○張○の二本發明す右一刀齋より忠於まて四代に至て當時の組大刀全備せり

昌孝云ふ組太刀とは諸流に形と唱ふるものなり

○小野派一刀流傳授の次第左の如し

○小太刀　○刄引　○佛捨刀　○目錄　○かな字　○取立免狀

○本目錄皆傳　○指南免狀

右の如く八段に定りたるを此方北辰一刀流の開祖となりてより左の如し

○初目錄　○中目錄免許　○大目錄皆傳

右の如く三段に減少せり

昌孝云ふ右師の語られたるは嘉永年間のことにて予が弘化年間師家へ入塾の此は一刀流中興の祖小野次郎右衛門忠明が一尺三寸なる薪を以て小幡勘兵衛大久保彦左衛門の二人に換る〳〵立ち向ひ二人は眞劍を以て向ひ試合ひ數度に及ぶと雖も忠明は悉く全勝を得たり其試合の蘊奥を師は發明せられ三ヶ條を掲け剪紙と唱へ門人に渡されけるが其後故ありて此剪紙傳授と云ふことを廢止せられたれど予は師に乞ひて其剪紙傳授を復し外に予が發明せる劍術心懸ヶ十ヶ條を編成し門人に渡す事許可を師より得たるにより多く之を門下に傳へたり

○伊藤一刀齋劍術の極意無想劍の塲を發明せんと多年苦心せられたれども容易に其妙旨を得られず依て神明に依賴し神諭を蒙らんことを祈願し相模國鶴ヶ岡八幡宮へ七日七夜參籠せられしに滿願の夜に至りても更に其告もなく既に神前を引き取らんと思ふ中何者とも知れず一人一刀齋の後に忍び寄り一刀齋を打たんと思ひしや又は神前の物を取らんと思ひしにや其足音に驚き一刀齋振り返り見れば何者とも知れず怪しき體のものイみ居たるゆへ其儘言葉をも掛けず扳き打ちに拂ひ二つになして引き取り遂に神明の告に預からずとなり後此事を門人に語られたるに我往年八幡宮參籠の節誤て人を殺害致したる事あり爾來其事を倩々考ふるに是即ち無想劍なるべし如何となれば我振り返り見て何の思案分別もなく目に遮きるや否や其儘扳き打ちにせしなり是全く劍道の極意無想の塲なるべしとぞ

○小野派一刀流にて最初の組太刀○一ッ勝○切落の意味一本發明すれば今日入門したる者にも明日はかならず皆傳渡すべしと申し教ゆるなり是甚だ六ヶ敷きことの樣なれども矢張一心一刀の處にて切落すと共に敵に當るの意受けると直に當るの意にて二心二刀にならぬ事を申したるのみの事なり一刀流と名付けたる處の意味これなり能く自得發明すべし

○往古劍術の皆傳は門下傑出の者一人に限り渡す古法なりしゆへ一刀齋も一人へ一刀一卷の書を傳へんとを欲すれども門下に次郎右衛門又善鬼と云ふ兩人の名人あり然るに次郎右衛門忠明は清潔の人なり善鬼は甚た心正しからざるものゆへ竊に忠明へ無想の意を傳へ下總國小金ヶ原に於て兩人を呼び寄せ一刀齋云はれけるは此度其方兩人の方一人へ皆傳渡すべし然るに何れも蘊奥を極め互に劣らぬ上達なれば如何ともすべき樣なし依て兩人此處に於て眞劍の勝負をなし打果したる一人へ皆傳渡すべしとのことなり兩人は之を聞き大に勇み双方とも眞劍を以て戰ひたるに遂に善鬼は忠明に打たれたり一刀齋是を見て大に喜び長光の作瓶割と名付けし名刀幷に一卷の書を小野次郎右衛門忠明に傳へしと云ふ

昌孝云ふ下總國小金ヶ原に塚あり其上に松の古木老い繁れり是即ち善鬼の塚なり土人その松を呼ひて善鬼の松と唱へり又瓶割りと名付けたる一刀は或夜一刀齋住處へ盜賊忍ひ入りたるを一刀齋太刀を提け其賊を追掛けたるに其賊大瓶のありたるを楯になし右より追掛ければ左へ逃げ

左より追ひ廻れば右へ逃げ打果すと叶はず一刀齋大にいらつて其大瓶と共に打込しに其瓶二ッになりしと云ふ爾來其刀を稱して瓶割と名付けしと云ひ傳へたり又此刀は一刀齋三十三度の眞劍の勝負に用ゆる所の名刀なり或説に此刀は一文字の作なりとも云ふ

○一刀齋鎌倉に住せし中他流のもの徒黨して一刀齋の妾と慣れ合ひ一刀齋に酒を強いて進め熟睡せしところへ夜打を掛けたるとあり時しも夏のことなり一刀齋は平生枕を蚊帳の裾にくるめ臥したる程の人なれとも枕刀も其妾の爲めに奪はれ且つ熟睡の處へ切り込まれしなれとも其物音に驚き目を覺し向ふより打ち込み來るをくゝり抜け後より其者を突き倒しければ同黨のものこれを一刀齋と思ひ切り掛けしを又突き倒し遂に敵の一刀を奪ひとり其太刀にて危き處を切り抜け門人小野次郎右衛門忠明に會し其切り抜けたる太刀の形を傳へ我身其時の落度を恥ぢ隱遁して行衛知れずと云ふこれ當流の佛捨刀なり

第三　劍術修行心得

○劍術に三段の打と云ふとあり右は稽古中に上中下の打方を心得て稽古すると專要なり面胴などを打つには如何にも強く打たねは成らぬ理なれども籠手突きなどは左ほど強く打たずとも隨分塲處によりては向ふの働き出來かね死に至る者故上中下の打方を心得て稽古致すべき事なり併し強く打つには勝ちたるとなし

○向ふを追ひ込むにも程のあるものにて餘り強く追ひ込みすぎては窮鼠猫を喰むの理もあれば兎角其節に叶はねばならぬ事なり

○昌孝問て云ふ他流に先々の先と申し敎ふることあり右は此方より打たん突かんと思ふ處返て向ふより其先きを掛け打ち來る處を此方より又其先を掛け打つとなりや師答て曰く全く左樣のことにてはなく此方より打たん突かんと思ふ處を向ふより其先を掛け打ち來り又突き來るを受け或は拂ひ或は切落しなとして先の氣を失はずして後の先にて勝を云ふとにて決して此方より其先を打つなどゝ云ふ六ヶ敷きことにてなく全く後の先を云ふなるべし

○世に一刀流の摺星眼などゝ唱ふるものあり流儀に地摺星眼と云ふ構へは一切なきとなり全く下段のことを云ひ誤るなるべし

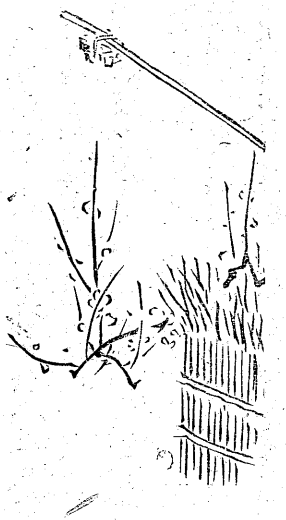
昌孝云く地摺星眼と云ふは當流皆傳の箇條に敵を跡へ追ひ込むには何ほど太刀を眼中又は喉へ付たりとも敵は跡へは下からぬものなり其節は地上の心と云ふとあり此心にて敵を責むれば如何なる剛敵たりとも次第〳〵に跡へ下るものなり其事を地摺星眼とは云へども師の云はるゝが如く地摺星眼の構へと云ふはなき事なり

○當流にて下段星眼の太刀を鵜鴿の尾の如く動かすは切先の死物にならぬ樣居付かぬ爲め移りの早からん爲め且は起りの知れぬ爲めなり無念流などにて平星眼にてッット構へ居るは居付くに非ず待つの意なれども悪しく心得其意を誤るときは其業居付て先きの意なきやうに成る者多し歎かはしきことなり

○眞劍勝負のせつ何にも構はず立ち合ふと直ぐに手の内を打ち込み其儘腹を目掛け突き行けば勝利疑ひなしと云ふ心得居るべきことなり

○深籠手を打つことは能々熟練すべし是程強く當たる打ちは無きものなり併し相手によると深籠手を打たんとすれば向ふ下段に成り其業をさせぬものあり其せつは左の陰にとりたるまゝにて向ふの面を飛みこみ打てば甚だ強く當たるものなり自得すべし

昌孝云ふ深籠手とは太刀を此方の左の肩へとり向ふの右籠手の横筋違ひに打つを云ふ又左の陰とは太刀を左の肩へ搆へたるを云ふなり



雜報

新年辭

烏兎冉々流水の如く、斗柄轉一轉して、吾人は茲に諸君と共に明治廿有九年の新乾坤を迎へ、北辰誌上再ひ見ゆるを得、其幸果して如何ぞや。先づ恭しく

今上陛下の萬歳を祝し奉り、次に第四高等學校及び北辰會の隆盛と諸君の健康とを祈る。

抑も我北辰會起りてより以來、將に一週年に垂とし、雜誌を發行すること既に八回、而も顧みれば誌上奮はず、轉た吾人をして編輯難の歎を發せしむ。遮莫吾人の任期滿つること數月を出でず、諸君の望に負くの恐實に少からざるなり、願くは更に筆硯を新にして、當初の精神を貫徹せんか。嗚呼吾人の菲才を扶けて、雜誌を隆盛ならしめんとするもの、果して誰そや

賀年式

紀元二千五百五十六年一月元旦、我校は例により午前九時職員學生一同講堂に集り、謹みて尊影を拜し奉り、學生總代佐藤信安氏職員に對し賀年の辭を朗讀し、校長職員に代りて答禮あり、終て解散す

寒稽古

夜來の飛雪猶未た止まず、風沍え地凍るの曙、竹刀の響えいとうの聲。寂寞を破りて聞ゆるものは無聲堂裡の寒稽古に非ずや。巨燵を擁して徒らに睡眠を貪るもの豈能く此間の消息を解せむや。我校幸にして未だ是等健兒のあるあり、以て心を強うするに足る、勉めよや。

我最愉快とする所

早曉衾を蹴て立ち、窓を開けば只四邊の皚々たるを見るのみ、朔風肌を劈くが如く、萬木盡く

怒號し、吹き來り吹き去り雪を捲て飛ぶ、外套身を固めて此寒を犯し、雪を蹈むて校に登れば、雪片顏を擊てとも、歩一歩温氣自ら躰に生ず、是れ我が最愉快とする所なり

高橋教授の病患

教授齡七旬を越えられたれども益々矍鑠、諄々として學生を教育せらる、然るに昨年末風邪に罹られし以來未だ出校せられず、聞く風邪の外更にレウマチスにも惱み給ふと、吾人は教授の老躰を思ふ者から、速に全快せられむ事を祈る

日下助教授の歸校

昨年十一月第四師團の召集に應じて、當地を出發されし同助教授は、爾來海城守備隊中にありて、具に辛苦を嘗められしが、去十四日無事歸校せられたり。吾人は先生の健康を賀し、再び先生の教授を受けん事を樂む。

新年宴會

一月十七日、東本願寺別院に於て我第四高等學校新年宴會を開く、會する者大島校長を始め本部醫學部職員生徒三百名、午後二時半園千秋君發起人總代として開會を告ぐ、何でも彼でも目出度〳〵と計りにて俗のお目出度人間となりてはならぬ、と滑稽の端緒を解きて退けば長松が親の名で來る御慶かななら で總代に原在文が御慶かなりとて登壇早々聽者の頤を外づさせたるは言はずとも知る人ぞ知る春秋君なり、大枚三貫の會費も昨冬以來物價騰貴の爲めとか蓋なしと云へば諸君は牛鍋の如しと思ふだろうが今日はそんな御馳走はないなと諧謔の言口を突て出づ、抱腹絶倒して起き上れば丸山環君眞面目にロジカルに開會の趣意を說明しつゝあり、其碧眼赤髯の手に成りたるに由るか將た我國史中世界に影響せしほどの事件なかりしに由るか、其何れなるかを知らずと雖ども吾人は萬國史を讀で最も不愉快に堪えざるとは一事一件の我國に關するものあらざるとは是れなり、然るに今や然らず、と叱咤し去て本旨に及び明治廿九年は古今未曾有の多望なる年なり、而して吾人何の幸か恙なくして之を迎ふるを得たり、是れ吾人が不肖を顧みず本月本日此に此の古今未曾有なる明治廿九年新年宴會を催す所以なりと、發起人總代三人まで演じ終れば大島校長起て招待を謝し一轉して我國現狀より宇內の形勢に及び曰く爾來の戰爭は國と國との戰爭なりし、國と國との戰爭は恐るに足らず、然れども天下活機の伏する所を察するに將來に於ては單に國と國との戰爭に止まらずして人種と人種との戰爭漸く近づきたるを知る、征清の結果は慥かに此の傾向に一歩を進ましめたるものゝ如し、即ち歐洲各國は互に相連衡して東洋の天地に臨まむとすとは近時新紙の頻々報道する所、吾人は實に清國に戰勝せり、然れども是れ僅かに一清國なり、將さに大に來らむとする人種的戰爭には如何かする、吾人は決して安閑として此の明治廿九年を迎ふ可からすと、嗚呼人種的戰爭の日に月に近かざるべからずして而して日に月に行はれつゝあるは識者の夙に憂へ又喜ぶ所なり、本邦歐米の文物を採用して既に三十有餘年、長足の進歩をなさゞるにあらざれども有形上無形上未だ彼が制を受くる者甚た少なしと云ふ可からず、是れ邦人の自屈心に因るか將た實力果して彼に及ばざるに因るか其由來する所を究めて之を矯正するにあらずむは寧んぞ能く人種的戰爭場裡に雄飛するを得むや、上の好む所下亦之を好むとか、校長の心とする所學生固より心とするに吝ならざるべし、以爲ふに來らむ第廿世紀は人種的戰爭の最盛時代ならむ、邦人たる者勳章の光燦たるに眩暈せず須らく猛然として大々覺悟

を確守す可し、既にして忽ち見る場の一隅より演壇に進む者を、是れを日下助教授とす、拍手喝采堂を動かす中に徐に口を開きて在清中の所見と所感とを話さる、吾人は先づ先生か異域の瘴霧に圓からぬ夢結びも敢えぬと八閲月なりしに關らず健全剛壯にして歸朝再び教授の任に當らることを賀し且つ謝せざる可からず、一寸の虫にも五分の魂あり豕の如しと雖とも支那人には支那人相應の根性あらむ、一昨年來の連戰連敗に流石の無神經家も幾分かの敵愾心を興起して改良進歩に孜々たらむとは何人も考ふる所、而して先生の談話は正に吾人が聞かむと欲する所に出でたり、宜なり衆生が其談話の長かれかしと希へるとや、斯る譯なるを以て今度の凱旋を迎へし歡聲か或は變して又突喊の叫聲とならぬとも云へぬ底の言説は吾人をして同情を表するに躊躇なからしめたり、佐野助教授が散るとを子にも教へておのれ先づ嵐に向ふ櫻井の里の朗詠は恐らく深き所存ありてのとならむ、次で滿場の動搖めき渡るは何故ぞ、罷り出でたるは淡路の國のお百姓で御座る、一言問はずして狂言の始まりたるを知る、狂言の狂は諸氏か演説よりは一段と面白ろく、萬才のあゝら難有かりけるは滑轉自在にして狂言の狂よりも難有かりき、吾人は之れが爲めに謹嚴なる諸先生の笑顔を拜するを得たり、蓋し聞く笑ふ門には福來ると、狂言萬才は夫れ福の神か、六時半校長の發聲にて天皇陛下の萬歳を三稱し席は酒宴と移る、相變らずの御馳走、淡泊の物、取り交はす盃にこそ温き友情はこめたれ、禮に始まり禮に終りしは八時頃、時は正月も半過き諸會合一時に來りて誰れしも懐淋しき折から此の如き盛況を致したるは是れ全く發起人たる二年生諸君が盡力に因るもの、其勞や謝せざるべからず、

柔道部新年宴會

正月十二日覽勝亭に於て柔道部新年宴會を催す發起する者は同部の有志、會する者は大島校長を始め職員諸氏尋常中學の校長職員、同部員を並せて五十餘名の多きに達す、佐藤龜久次氏開會の辭を述べ、之につきて岩崎先生の柔道に就きての一場の演説あり、酒三行にして劒を拔て舞ふ者、聲を吭けて歌ふものを見る、午後七時衆皆快を盡して散ず

Ploetz—Anszug aus der Geschichte.
Pollard—Chancer.
Popowski—The Rival Powers in Central Asia.
Proctor—Illusion of the Senses.
Quicherat—Dictionaire Latin-Français.
Ribot—German Psychology of To-Day.
Schlömilch—Abungsbuch zum Studium der höheren Analyse.
Schopenhauer—On the Four-Told Root of the Principle of Sufficient Reason.
Scott—Kenilworth.
Serret—Lehrbuch d. diff. u. integ. Calculus.
Sladen—A Japanese Marriage.
Statesman's Year Book 1895.
Sweet—A Primar of Phonetics.
Tavel—vergleichende Morphologie der Pilze.
Thomson—Mathematical and Physical Papers.
Weichmann—Lecture-Notes on Chemistry.
Wilkinson—The Brain of the Navy.
Worman—The German Echo.

木村巖	臣民實踐道德學	一冊
浮田和民譯	經濟學原理	一冊
永田健助	商業經濟	一冊
牧山耕平譯	經濟學粹	一冊
岡田朝太郎	日本刑法論	一冊
宮本正貫	東洋歷史	二冊
曾根俊虎	日本外戰史	一冊
	唐書	八二冊
宗孟寛	日本帝國新地圖	一冊
湯本文彥	平安通志	二〇冊
參謀本部	臺灣志	一冊
大鳥圭介	長城遊記	一冊
參謀本部	往清誌抄	一冊
矢木久太郎	日本酒釀造法	一冊

明治廿八年九月以後增加書目

Anderson—New Manual of General History.
Bain—Companion to the Higher English Grammar.
Batchelor—An Ainu-English-Japanese Dictionary.
Bax—A Handbook of the History of Philosophy.
Bouillet—Dictionnaire universal d' Histoire et Geographie.
Commons—Distribution of Wealth.
Dillon—The Laws and Jurisprudence of England and America.
Earle—Philosophy of the English Tongue.
Engelin u. Fechner—Deutsches Lesebuch V.
Finck—Lotos-Tine in Japan.
Gardiner—The French Revolution.
do. —Puritan Revolution.
Gibbins—The Economics of Industry.
Gouin—The Art of Teaching and Studying Languages.
Grassmanns—Die Ausdehnungslehre.
Griffis—Religions of Japan.
Harnack—An Introduction to Differential and Integral Calculus.
Hawthorne—Twice-Told Tales,
do. —Selections from Twice-Told Tales.
Heath—Geometrical Optics.
Helmholz—Popular Lectures on Scientific Subjects.
Hirazuka—Worterbuch der Japanischen und Deutschen Sprache.
Hume—A Treatise on Human Nature.
Irving—Life of Columbus.
Johnston—The World-Wide Atlas.
Kant—Kritik der reinen Vernunft.
Kingsley—Westward Ho!
Ladd—Introduction to Philosophy.
Laloi et Picavet—Introduction Morale et Civique.
MacCarthy—Epoch of Reform.
Max—Muller—A Sanscrit Grammar.
Mill—On Liberty.
Morris—Early Hanoverians.
Naftel—The Second German Excise Book.
Nakae and Nomura—Dictionnaire universal du Français-Japonis.
Otto—German Conversation Grammar.
Otto—Holz—A New Pocket Dictionary of the English and Russian Languages.
Picton—Story of Chemistry.

大工原銀太郎	菜食篇	一冊
塚本又喜	飲料篇	一冊
奥村須四郎	烟草編	一冊
高橋橘樹	製茶編	一冊
矢部規矩治	西洋酒釀造篇	一冊
辻暢太郎	肉食編	一冊
山上萬次郎	新撰地文學	二冊
横山又次郎	化石學教科書中卷	一冊
白井光太郎	植物自然分科檢索表	一冊
池野成一郎	顯花植物分科檢索表	一冊
松村任三	增補植物名彙	一冊
久保田米僊	美術品畫譜	四冊
守住勇魚	新定圖畫範本	三冊
鹿持雅澄	萬葉集古義	九五冊
井上頼國	中等國文	一〇冊
中根淑	送假名大概	一冊
加茂眞淵	古今集講義	二冊
渡邊弘人	詞のやちまた語釋	一冊
松本豐多	漢文中學讀本	一冊
野口寧齋	大靈餘光	一冊
	水滸傳	二〇冊
井上毅	梧陰存稿	二冊
中野重太郎	逍遙遺稿	二冊
伊勢平藏	四季草	五冊

投書心得

一投書は本會原稿用紙に限り御認めありたし

一長文と雖も全文を寄贈せざれば掲載せず

一雜誌上には雅號のみを記載するとを許せども姓名は必ず編輯委員まで御報道あるべし

一學理上の論說諸小會の記事雅文詩歌等續々寄投ありたし勿論言の或は政治を論し或は德義に背くものは一切掲載致さゝるべし

明治二十九年二月一日印刷
仝　年二月十五日發行

編輯兼發行者　中川忠順　金澤市五十人町十一番地
印刷者　中村孝　金澤市廣坂通第四高等學校時習寮
發行所　第四高等學校北辰會
印刷所　株式會社秀英舍　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

（明治廿八年二月廿七日内務省許可）